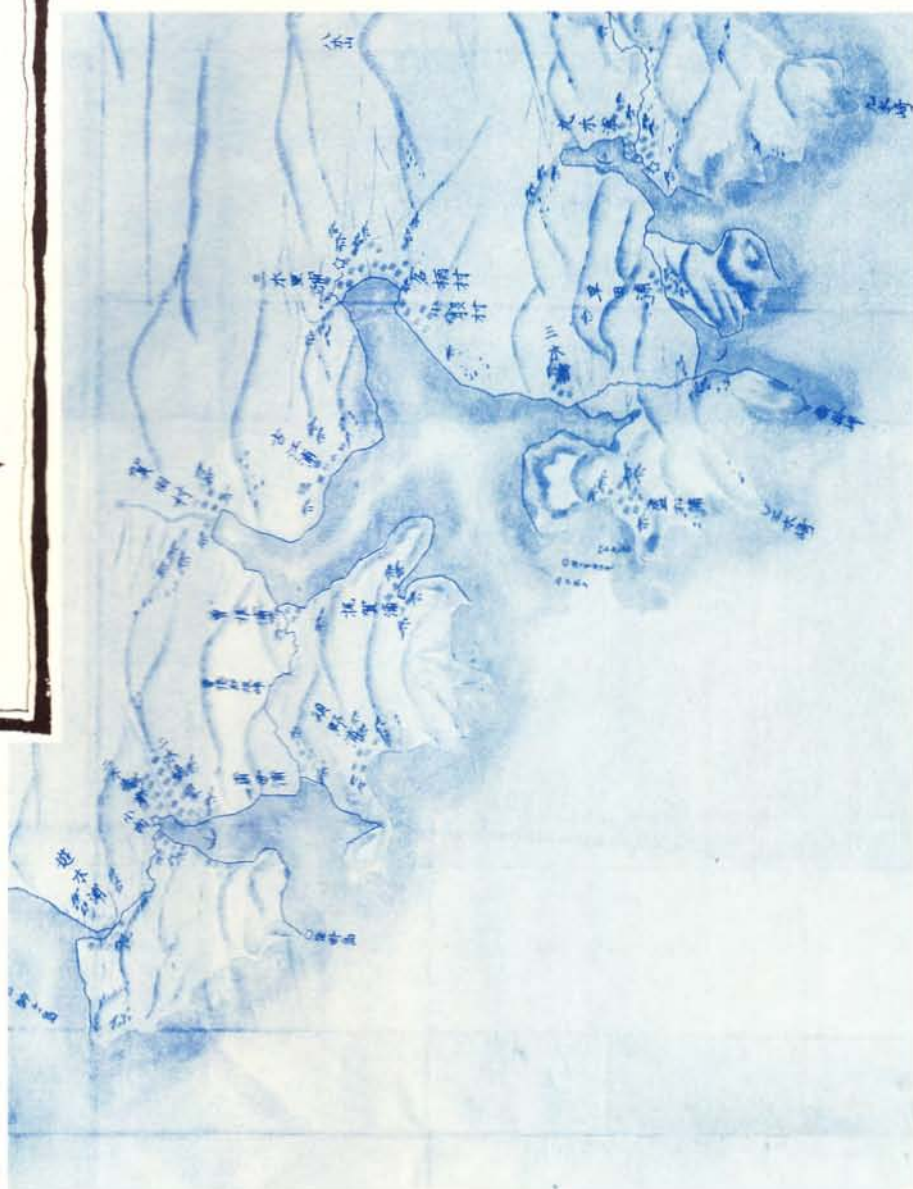


史料と伊能図



伊能忠敬

研究



二〇一一年 第六一號

伊能忠敬研究会

表紙図解説 米国議会図書館所蔵

伊能大図第132号 紀伊半島九鬼浦付近

議会図書館所蔵大図中、本州部分では数少ない彩色図の一つである。山の描きかたは淡白だが、測線は確かとみえる。天気続きだったらしく天測記号三個、また、湊の記号も三個と盛りだくさんである。紀伊半島南東岸、尾鷲から新宮への途上にあたる。熊野灘を前にするリアス式の海岸部で、小さな湾入の奥に村が点在する。現在は賀田村、曾根崎、梶賀浦までが尾鷲市、それより南は熊野市である。それぞれの岬を廻りきらず、途切れた測線が困難な行程を思わせる。前泊の尾鷲から一隊は岬を横切り、忠敬の率いる一体は九木崎への海岸の一部を測り、「大難所舟着難キ所より乗船」し、方位（支王）、形勢をみながら岬をまわって九木浦に着く。その結果、およその地形は把握できているようである。この日、日記には「我等坂部は休番にても同外役を勤」とする。休みたかった本音がついこぼれたのだろうか？南北朝時代以降九鬼水軍として知られた九鬼一族の発祥の地とされる九木浦には文化二年（一八〇五）六月二十四日・二十五日と二泊している。宿は狭くて分宿というが、富士山を観測したいがための二泊である。残念ながら富士山をとらえることはできなかった。九木神社の先、九木港の灯台のある小さな岬からの観測を試みたのだろう。一泊目の夜八ツ（午前二時ごろ）後、坂部らと約三〇丁、燈明台に上り、早朝の山々を測ったが雲がでて見えなかったようである。大難所の上下だったという。夜中にすこい執心である。二泊目は替わって平山郡蔵らが挑戦するが、結局美らなかった。忠敬は九木浦から舟で三木里浦へ移動、九木浦、早田浦、三木里浦など、横切り、浦沿いの測量、舟からの略測と、チーム編成も入り組んでいる。舟については「何れ大海を請巖石聳へ船測難叶、羅針を以舟中外測す」としている。天文方の市野金助との不和はこの地で顕在化した。日記二五日の末尾に「市野この日より病氣」とあり、以後宿舎も別となる。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次 61号

震災レポート

東北地方太平洋沖地震と香取市の被災

事務局

1

話題Ⅰ

伊能忠敬研究会15周年に寄せて

伊能忠敬関係資料国宝記念祝賀会始末

例会報告

藤岡家旧蔵資料の寄贈

事務局

4

話題Ⅱ

佐賀城下へ

忠敬と江戸庶民の文化・大山講

「大河への道」——志の輔らく——

伊能大図総覧の地名と景観（十五）

研究ノート

伊能忠敬研究（十一）忠敬の見た風景

事務局

10

話題Ⅲ

「伊能忠敬の浜名湖紀行」受講記

伊能忠敬の足跡（展示会報告）

偉人ランキング・出版

お知らせ

香取市義援金受付窓口

各地のユース・会員のお便りなど

事務局

45

表紙図解説 鈴木 純子

編集部

46



写真は被災前のものです。現状は次頁にあります

東北地方太平洋沖地震と香取市の被災

このたびの東日本大震災および津波により、被災された方々からのお見舞いを申し上げます。

会員および会員関係者の皆様のご無事を願っております。

(被災状況などをお知らせ下さい)

原子力発電所の事故もあり、救援や復旧の遅滞に、もどかしい思いがいたします。一刻も早く、積み残しのない復旧・復興が進められることを祈念いたします。

*東北地方太平洋沖地震は地震の、東日本大震災は津波、原発事故を含む災害の名称とのことです(気象庁HPによる)

香取市でも家屋の全・半壊、道路の亀裂、液状化などの被害が甚だしく、皆様ご存じのあの佐原地区の伝統的街並みも甚大な被害を受けました。伊能家旧宅も屋根瓦が落下し、見学も当分休止となっています。市としての損害推計額約二百億円、家屋の損壊は約三千五百戸とのこと。あらためてお見舞い申し上げますとともに、復興と旧宅の修復を念じます。

香取市では三月25・27日に、完全復元伊能図全国巡回フロア展の開催が予定されておりましたが、震災のため、中止のやむなきにいたりしました。地元佐原での展示であり、香取支部の皆様のご尽力もあつて盛会を期していた矢先、まことに残念です。巻き直しての他日の実現を期したいと存じます。

(事務局)

被災した伊能家旧宅など香取市の街並み



伊能家旧宅



小堀屋・福新呉服店

香取市に義援金

伊能忠敬の生涯をしのばせる旧宅や、佐原の街並みをご覧の状況です。

小野川沿岸のみでなく、香取市では道路等の亀裂、液状化、川底の隆起など被害は広範にわたっているとのことです。

伊能忠敬記念館は建物、展示ケース等、特に被害はないということです。

香取市では義援金を募集しており、伊能忠敬研究会としても、ご縁薄からぬ土地として、代表理事等とも相談の上、これに協力することとしました。

僅少ですが、伊能忠敬研究会として、金10万円をお送りしました。

事後になりますが、よろしくご賛同下さい。

会の財政では十分なことはできません。個人でのご協力も合わせてお願いできればと考え、香取市の義援金募集窓口についての案内を本誌45頁に記載してあります。よろしくご検討下さい。



正文堂書店



正 上

〔被災状況の写真は伊能忠敬記念館前館長伊能楯雄氏撮影〕

伊能忠敬研究会創立 15 周年に寄せて

伊能忠敬関係資料国宝指定祝賀とあわせて記念例会

星 埜 由 尚

会員諸氏には先刻ご承知のことですが、昨年六月に伊能忠敬記念館に保管されている伊能忠敬関係資料二千三百四十五件が国宝に指定されました。また、伊能忠敬研究会は創立十五周年を迎えることとなり、これを併せて去る二月十二日、千葉県香取市佐原において、伊能忠敬関係資料国宝指定記念祝賀会と伊能忠敬研究会創立十五周年記念例会が伊能忠敬研究会の主催、香取市・香取市教育委員会の後援により開催されました。

伊能忠敬記念館所蔵の伊能忠敬関係資料は、国の重要文化財に指定されていましたが、伊能家に保管されてきた全ての関係資料が記念館に寄贈され、伊能忠敬の全国測量の全体像を明らかにする資料がひとまとまりになったことにより、このたび国宝に指定されたものです。歴史資料の分野では、慶長遣欧使節関係資料、琉球国王尚家関係資料に次ぐ三件目の指定であります。

文化財保護法第二十七条2には、「文部科学大臣は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいしない国民の宝たるものを国宝に指定することができる。」と規定されており、伊能忠敬の業績は世界的価値を持った類を見ないものであると認められたと言えます。

これまで伊能忠敬研究会が行ってきた会誌「伊能忠敬研究」発行などの学術活動、各地での伊能図展覧会などによる伊能忠敬の人と業績

に関する普及・啓発活動も、国宝指定の審議に当たる先生方の心証によい影響を与えたのではないかと密かに思っている次第です。

当日は、雨模様の天気にもかかわらず、地元香取市の市長、市議会議長はじめ関係者、伊能忠敬ゆかりの東金市、横芝光町、九十九町の市長・町長、地元選出の国会議員、県議会議員、市議会議員、国土地理院長及び参事官、(社)日本ウオーキング協会、日本土地家屋調査士連合会など関係団体の方々が集まり盛会でした。伊能忠敬研究会の会員は、遠くは北海道、九州から多数の方々が参集されました。特に、伊能家子孫の方々が多数参加され、伊能家末裔の集合は、初めてのことであり、大変意義深いものでありました。

伊能忠敬創立以来十五年を経過し、このたびの伊能忠敬関係資料の国宝指定も踏まえて、伊能忠敬研究がさらに深まっていくことを期待したいと思います。私見ですが、伊能測量の技術的側面のさらなる探求、幕府の対外政策における伊能測量の位置付けなど今後さらに研究を進める課題がまだまだあると思います。また、普及・啓発活動については、一昨年の深川での展示を皮切りに「完全復元伊能図全国巡回フロア展」を全国各地で開催してきているところですが、今後飯田市、千葉市、帯広市、八女市、大阪市、広島市等において伊能図フロア展が開催される予定です。

(ほしの よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)



渡辺名誉代表挨拶

伊能忠敬関係資料国宝指定記念祝賀会始末

渡辺 一郎

しばらく、研究会として大きく報道されるようなイベントが無かったので、何かきっかけを、と考えていたところ、香取支部長から佐原で懇親会を、というお話を聞きました。

三月には佐原でフロア展がある。佐原で発足した伊能研の創立十五周年でもある。国宝指定祝賀会は、まだおこなわれていない。少し僥越ですが、国宝指定記念、伊能研十五周年記念祝賀会と銘打って、佐原で集会を開いてはどうか、ということになりました。

折角やるなら、地

元の有力者と、伊能忠敬にゆかりの深い横芝光町、九十九里町、東金市の首長さんにも声をかけよう。関連首長さんまで輪を広げるなら、前向きな話として、協力して大河ドラマを誘致しよう。その顔合わせも兼ねよう、とシナリオが固まった。そこまでの手順は色々あるが、まず、

研究会の会員が何人集まってももらえるかが基本である。佐原は遠い、二〇人くらいかな、三〇人は大丈夫だろう。お客さんを入れて五〇人にはなるだらう。色々議論があったが、あたってみなければわからない。そこで、会員のうち約百名に次のような総集合の招請状を送り出した。

「名誉代表の渡辺です。伊能忠敬関係資料が遂に国宝になりました。フランスで発見した伊能中図の佐原里帰り展をキッカケに、「伊能忠敬再発見」の旗をたて、伊能忠敬研究会を発足させましたが、江戸博の伊能忠敬展、気象庁で伊能大図四三枚を発見、伊能ウオークの催行、俳優座による演劇・映画の上演、アメリカ大図発見とビジュアルイベントが続き、日本中に伊能忠敬の名前を広めました。

テレビにもしばしば取り上げられ、「そのとき歴史が動いた」「ときめき歴史館」「お正月ドラマ・四千万歩の男」「知ってるつもり」など主要番組には、すべて登場しました。このさき、目指すのは、「大河ドラマ」だけかな、と考えます。

目下、完全復元伊能図フロア展が、全都道府県の巡回を目標に、好評裡に催行中です。本展は大河ドラマの実現に影響を与えうるイベントと考えますが、何といっても、大河ドラマには、千葉県民、香取市民の熱烈な応援が必須と思われます。

国宝指定を祝賀し、大河ドラマ実現への願いを込めて、佐原で本会主催により、記念例会、祝賀会を開くことにしました。私、渡辺が総幹事を務めます。会員の総力を結集して御協力いただき、盛会となりますことを、お願い申し上げます。

聞くところによると、「お正月ドラマ・四千万歩の男」の視聴率は一〇・二％でした。視聴率の面では大河ドラマ登場の資格をクリア



子孫・伊能七家の皆さんと参集した会員たち

しています。あとはどれだけ、地元に進捗力があるかどうか、によるようです。香取市ほか東総各地の総力を結集して実現できたらいいな、と思っています。キツカケになれば、という想いからの企画です。

不様ですが、来賓、一般への案内に先立ち、中心メンバーの参加規模を確認したたく、事前申込みをお願いしました。よろしくお願ひします。」

このお願ひに対し、そうだと、即座に反応がありました。六千円会費の申し込みが四七名、三千円の名簿参加二六名でした。御協力には心から御礼申し上げます。他に事務局メンバーが一二名おり、子孫と伊能七家の参加約二〇名がみこまれ、立派に成立することが事前に確認できました。

そして香取支部長の尽力で、多数の地元来賓の参加も決まりました。首長さんの御出席も色々なルートでお願いして実現しました。

ところが、当日は天候不順、最悪の条件下でしたが、来賓各位は全員御出席で、子孫、伊能七家を加えた出席者は一二一名となり、盛大なパーティーでした。名簿参加を含め、会費をいただいた人数は一六八名で、伊能ウオーク開始に先立ち、高輪プリンスで開いたオーブニングをしのぐ賑やかさでした。

報道は共同通信社デスクの橋田さんが出役して、大変よくリードしていただきました。共同の配信ニュース「伊能忠敬研究会は国宝記念祝賀会を佐原で開催、伊能の子孫約三〇人集合」を地方紙約三〇社がWEBで取り上げました。二〇社くらいは記事にしましたでしょう。

NHKは東京本社放送で二一時のニュースに取り上げていただき驚きました。朝日、読売は千葉版、日経は東京本社版の社会面の囲み記事でした。読売は予告記事も出してくれました。フロア展のイベント効果も高めることでしょう。

祝賀会の待ち時間を利用して、香取市長、横芝光町長、九十九里町長、東金市長の首長会談をおこない、協力して大河「伊能忠敬」を実現しよう、という合意に達しました。祝賀会では各首長から決意表明もありました。一応、動き出したので、よかったな、と思っています。これからは、フロア展とともに、大河を目標に前に進みたいと思います。よろしくお願ひします。



講演会は大盛況



伊能洋さんの挨拶

このイベントの会計は若干の黒字となりました。

当初、赤字を心配し、名簿参加という寄付金をお願いしましたが、盛会で多数の御参加をいただいたこと、開花亭として交際したこと、高宮グループでCD制作費、レジュメ、参加者名簿の印刷費を持っていただき、当主の高宮啓明さんから五万円の御寄付をいただいたこと、伊能敏雄市議

(理事)の御尽力、などが大きく寄与しました。

柏木さんには、歌手・伴奏者費用を形ばかりにさせていただいたこと、名札印刷を宮内さんが引き受けていただいたこと、など関係者の皆様に多大なお世話になった結果です。厚く御礼申し上げます。

差額は、別途お預かりして、会報のカラー化実験を兼ねたカラー版記念誌の発行などに充てたいと考えております。

(わたなべ いちろう・名誉代表・理事)

例会報告

別記のとおり、2月12日に香取市で伊能忠敬関係資料国宝制定記念・伊能忠敬研究会15周年記念例会を行いました。その関係で通常の例会は休みました。記念例会の詳細は記念特集号としましたので、本誌上は活動の記録にとどめます。

(事務局)



第1部

- ①伊能忠敬記念館国宝指定特別
展見学
- ②伊能忠敬と故伊能陽子さん
のお墓に献花・焼香

第2部（開花亭）

- ①講演会
 - ・忠敬長女・お稲さん夫婦の系譜
に関する新事実（戸村茂昭）
 - ・フランス中図の佐原招聘から完
全復元伊能図フロア展まで（渡辺
一郎）
- ②伊能測量隊関係子孫交流と懇
談
- ③祝賀パーティー
 - ・来賓参加・「確かな一歩」披露

写真（上から）

記念講演講師戸村氏紹介

子孫の方々

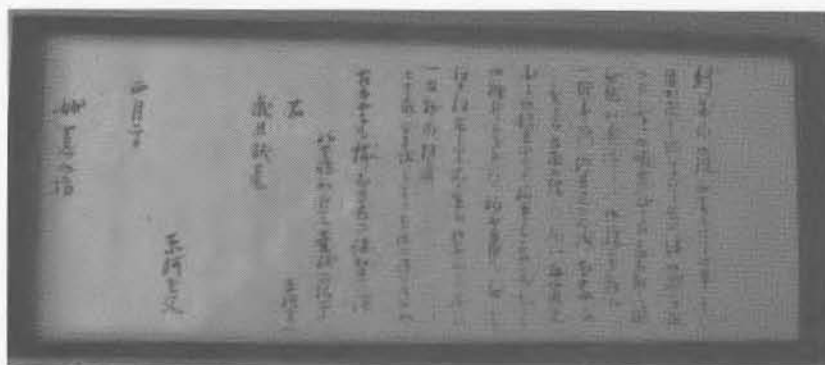
お稲さん系

神保さん（忠敬の父系）

お琴さん系

伊能洋さんの写真は7頁に

話 題



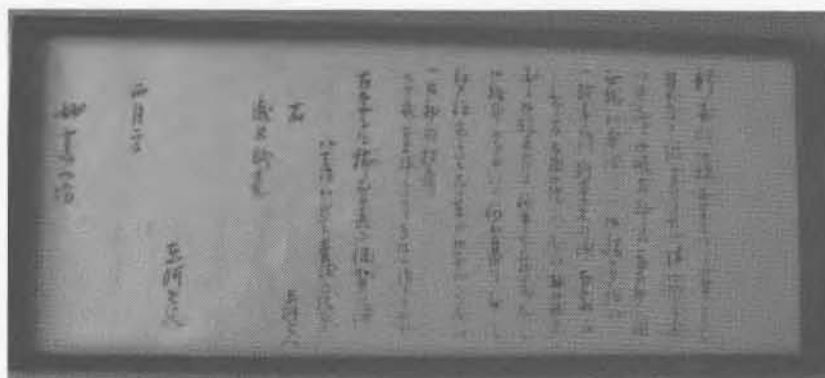
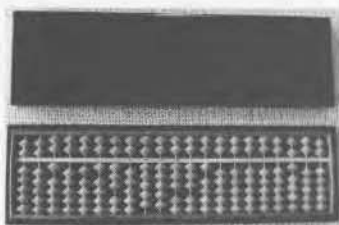
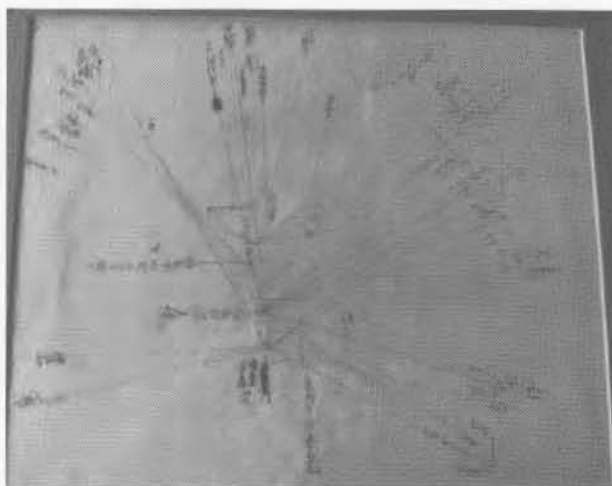
藤岡家旧蔵資料寄贈

—伊能忠敬記念館へ—

写真上から

- ・江川太郎左衛門宛書状
- ・測量下図
(稲取付近・左が北)
- ・忠敬のソロバン
- ・妙薫宛年賀状(第35号
(2004)に紹介記事)

以上の4点です



佐賀城下へ

松尾紀成

文化九年（一八一二）九月一九日、牛津の宿で測量隊は多久の別府からきた坂部隊（唐津―佐賀海道測量）と合流した。

翌日は、佐賀城下の測量である。ここでは『伊能忠敬測量日記』①と同測量隊の「匱絵図」（あらえず）②を基に城下の街道探訪を試みたい。

測量隊は佐賀への道を人員も大幅に入れ替えて、先手と後手に分かれ、能率よく、先手は嘉瀬橋から先を佐賀城下入り口まで、後手はその手前嘉瀬橋まで、そして、佐賀城下の測量は、両手一丸となつてすすめるやりかたを執つた。五日ぶりに顔を会わせた隊員たちである。測量隊は忠敬の内弟子と幕府天文方の下役たちの混成隊で、隊員の融和が第一である。伊能忠敬の指揮下、坂部貞兵衛の指揮下と、人心を一新しながらの測量であつた。

牛津本町の止宿入口（芦刈道分岐点）からはじめ、佐賀郡窪田（久保田）村を経て、嘉瀬橋前まで、先手が残した杭に繋いだ。

坂部貞兵衛が指揮を執つた先手は、嘉瀬川嘉瀬橋前より始め「渡巾四十五間」と測り、橋を渡つて右手嘉瀬川が大きく蛇行する河畔には、佐賀藩の刑場があつたが測量日記は触れていない。人が人を裁き処刑するというのは、何時の時代でも悲しい出来事である。当時は見せしめの意味もあつて、公開の場で執り行われた。こういう残酷な処刑の場を見物させる反面、罪人が刑場にひかれる道中、縁故者と今生の別

れをする場を設けた「別の松」と云われる所がある。

下嘉瀬村扇町の若宮社を曲がると本庄江川。高橋巾十六メートルを渡つて佐賀城下の八戸村（やえむら）に入る。伊能測量隊の覚え書きの一種である「匱絵図」

に「汐入り船入り」としている。さて、この匱絵図は、佐賀城下の当時の街道筋を探訪確認するのに、見逃すことができない好資料である。この絵図を参考に、街道の風物を確かめてみたいと思う。

本庄川は潮が満つと船が入ってくる、船の通航に邪魔にならないよう橋の桁を高くした、これが名前の起こりである。

八戸村古宿には木戸を設けて番所があつた。橋から此処までを八戸村のなかで高橋宿と称した。番所はいわゆる佐賀城下の西の木戸（構口）である。匱絵



図1 八戸宿木戸、地蔵尊像、龍雲寺、長瀬町、問屋、問屋前諫早海道が見える

（伊能忠敬記念館蔵）

図にも木戸（廿）が描かれており通りを故意にずらしている。現在もこの木戸跡ははっきりしている。東西に走る通りを、此所でわざと北に三間ばかりずらして鍵型をつくっているのである。

測量隊は番所前の九右衛門宅で小休止、両手一体となって城下測量の体制を整えた。八戸本村（古宿）を行く。街道左手、川のそばに地藏さんが描かれている。宝暦六年鑄造の胴まわり一丈三寸（約三メートル）もある大きな青銅の地藏尊像であつたという。「八戸の地藏さん」として親しまれてきた。しかし不幸にも昭和の大戦争中金属供出で地藏さんも出征し、今あるのは戦後、石造で再建されたものである。

地藏川の向かい、街道から百メートルばかり入った松の木陰に龍雲寺がある。古い地図でみると堀囲いの寺域で、中世の八戸城の跡と伝えられている。この寺には『葉隠』の口述者山本常朝の墓がある。奥には多久図書頭茂富の墓石があつて、図書頭の八人の殉死者の墓も西端に立っている。多久図書頭というのは、戦国末杵島郡で威を振るつた柄崎城主後藤貴明の孫にあたる。多久安順之養子になつたが、養父と折合が悪く、義絶し蟄居した。晩年、藤津郡鳥坂村に住んだ（嬉野市塩田町谷所）。その茂富、重態の報をうけて常朝誕生の翌日、佐賀を発つた常朝の父山本重澄は、図書頭が案外元氣な様子に氣を良くし、男子誕生を報告し、殊の外喜ぶ図書頭に願つて、わが子（常朝）の初名を所望した。図書頭はお祝いの品々と「松亀」の名を与えたという。山本常朝の年譜にある。

測量隊は佐賀城下の長崎街道を西から東へと進んだ。長瀬町に入る。測量日記には「市中長瀬町、左に問屋場、右に一向宗照光寺」とある。龜絵図に「問屋」の字が記されている。市街地図で確かめると長瀬町の道標が立つ通りである。この道標には手の指さす方向、西「ながさきみち」、東「こくらみち」、そして碑の側面南へ「いさはやかい場」

とある。なるほど、この道標の向かいに諫早渡海場へ下る分岐点が見える。

この長瀬町の問屋場（継場）は佐賀城下西の継場で、東の継場方も一つ元町にあつた。

「佐賀城下では、寛政十四年、東西両町に各三十疋ずつ、計六十疋の札馬が配置された（後には百疋）」「長瀬町の下馬散使卯右衛門は、寛政三年冬より湯病を患つたが、兼て貧窮にて療養方不行届で、御救い下されたく、と大馬散使より藩に救助金の下賜を願つている」（『佐賀藩の総合研究』）。馬散使について、広辞苑には（馬差）「江戸時代に、宿駅で人馬の役を指図した宿役人」とある。

長瀬町を北に入つた所、築地には佐賀藩の反射炉があつた。安政六年十月四日、越後長岡藩の河井継之助は長崎への旅の日記『塵壺』に、反射炉の大砲鑄造と本庄町からの諫早渡海について記している。「兼て聞く「反射炉」を見物に」いつたが、手続きがないと内へ入れないと断られ、外からみている。「高さ八、九間もあらんか、鉄のタガ、石灰塗、水車にてキリを入れ、其の音、頗りなり」と書き、一日佐賀に逗留して、手続きをとれば見物できるだろうが、それまで、努力し見物しても甲斐はあるまい、と諫早渡海場の本庄町へ下つた。乗船は夜ということで、船宿に休息しているとき、幸いにも彼は「反射炉」でこしらえた大砲が曳きだされ船積みされる光景に出会う。

「川端の小屋に三十六ポンド、二十四ポンドと並べられ：公儀注文の美事な品で」あつたという。

そしてその夜遅く渡海船は出た。安政六年十月四日は、新暦では十一月六日にあたる、夜の諫早渡海の乗船である。

此の船、屋根なく、寒き事なり、船、四ツ（午後十時）過に出る。

右に高良山（⁴）とても高き山あり、左に島原の温泉あり。海は泥海なれ共、風景面白し。島原と此の間の入海、図の如く奇なる地勢なり。諫早へ五ツ（午前八時）に着く。乗り合い予共五人、小舟にて数艘出たり。中には楠の丸木舟も数々あり、これ一番早き由。『塵壺』

乗客五人の小舟で、諫早へ渡海のようなすを克明に綴っている。渡海船は小舟数艘が出ていたらしいこと、川は潮がない時は、潟地之川底を露呈する「カラ川」、有明海の満潮を利用しての渡海であった。

測量隊は 六座町、伊勢屋町、そして善左衛門橋を渡って中町、米屋町に出た。龍造寺八幡の後を回り白山町の通りにでる。そこに高札場があった（測量日記）。現在その場所、道路の新設変更等で確認できない。その先左に筑前街道川上道の分岐点がある。いわゆる唐人町口である。佐賀城下の長崎街道は、城からできるだけ遠い所を通る様になっていた。旅人が近道の堀端を通るのをきらった。伊能測量隊の亀絵図にも、およその位置と思われる所にマル囲いをし「城中不見」と断りを入れている。

白山町から勢屯町（現白山二丁目）を南下し東に折れる元町の外角に問屋場があった。亀絵図にも「問屋場」とあり、現在のエスブラツツの南東角に位置する。測量日記は「元町、右問屋場、左に浄土宗誓念寺」、この誓念寺は称念寺ではと思われる。江戸前期に願正寺とともに藩の上使屋を勤めていた寺で、参道を元町の通りに開いていた。この元町の問屋場は前記長瀬町の問屋場に対し佐賀城下東の継場で、交通の要所である。

測量隊の宿舎は、東の端に近い柳町にあった。呉服町、昔の大坪書店の前から蓮池町に入るとそこに石橋の「晒橋」がある。柳町は現在も往時の街並みが残っている。左手に宿舎、現在の「歴史民族資料館」

よりやや先にあたる位置か、亀絵図にも「止宿」の文字を入れている。測量隊は、なお城下、東の構口まで測った。亀絵図をみれば、明らかにこの木戸も鍵型につくり、通りを南にずらし、構口橋を渡ること



なるが、現在の通りは直線となるよう橋の位置を架け替えている。柳町の投宿は本陣（伊能宿舎のこと）穀間屋 五兵衛、角右衛門、源一郎の三家を宿舎とした。

城下入口へ町奉行手付土屋点左衛門が出迎えたが、宿舎に着くと町代官山領主馬（やまりようしゅめ）が挨拶にきた。

「此人、司馬江漢や伊能紫湯入魂に付、我等身分をも兼て聞知るよし」（測量日記）、と語った。

藩主から使者が遣わされて伊能、坂部兩人へ拝領物があり、また一同に東嶋藤橋をもって国産が贈られた。

ここで「東嶋藤橋」という名前がでてくるが、前後の関係から「東嶋平橋」と同一人物であろうと思われる。初顔は松浦の呼子浦で八月二十五日、松平肥前守内東嶋平橋と名乗る。次ぎは東松浦半島の測量から伊万里へ向かう畑津浦の宿舎に江頭伊平（伊兵衛とも書く）と同道でくる。この江頭も測量隊と関わりをもつ郡目付である。そして三回目は、唐津領から伊万里の佐賀領へ入る郡境に、庄屋達とともに測量隊を出迎えている。いわゆる佐賀藩の測量隊応接係ともいうべき働きで、いずれも「平橋」である。

測量隊を率いる伊能忠敬にとって、この東嶋の名はずっと以前に聞いた人だった。文化二年遠大な計画ではじまった西国測量のはじめ、紀伊半島の測量に思いのほか手間をとり、途中江戸の天文方高橋景保に測量計画の変更・隊員増について、相談したところ佐賀藩の東嶋平橋等を入れて別動隊をつくってはどうかと測量隊の意向を打診されたことがあった。忠敬にとっては見知らない人物であって、なお今次の測量から、隊員は幕府天文方下役と伊能忠敬の内弟子との混成隊である。ともすると測量遂行が、隊員の気分気質に左右され難しい状況にあった。

そこで九月二十二日の大津からの手紙⁽³⁾で、身分の上の人が供侍・小者など測量に無縁な従者を連れてこられても止宿にも難儀するし、なお、これまで大難所など苦勞しながら働いてきた隊員のなかに、見知らない上格にも見える人が入ってきたら隊員の融和もでき兼ねますと断った経緯の人だった。天文方高橋景保補佐の間重富が、東嶋の技術について厳しい見方をしているの、何らかの接触があったものと思われる。

この東嶋と山領はどのような関係にあるのかはつきりしないが、山領も伊能測量に関心を寄せていたことは確かである。

佐賀城下の伊能忠敬の宿舎に町代官として挨拶に出た山領主馬である。彼が「司馬江漢・伊能紫湯（人物不詳）に入魂」と打ち明けているように、司馬江漢とは親しい間柄であった。評論家の中野好夫が司馬江漢・山領主馬の友情について論じている⁽⁴⁾。ように、司馬江漢は随筆集に「肥前佐賀山領と云人は、江戸八年在番して去年早春に国へ返りぬ、予と友として善」と述べている。そして「此頃書状来ル、其文中に、爰に一ツの珍事あり、御慰として左に書載ス、去文化九壬申の六月廿七日の事にて、…」と佐賀の屋敷の中で、大きな蛙と一尺七、八寸の蛇が争う珍事を述べた山領の書状を紹介している。

（「無言道人筆記」 『司馬江漢全集』）

江漢の書簡集に山領宛ての手紙が数通入っている。文化二年頃と推定された六月二十六日差し出しには、「一両日中には地球図出来仕候と存じ候」とあり、江漢の地球図に山領も興味を注いでいることがわかる。山領との交友について中野好夫がこの時期はごく初期の段階と推定している。

山領主馬の江戸在番は、佐賀藩の記録では文化二年正月六日の項に、「同十六日、江戸参着」（『佐賀藩近世史料』⁽⁵⁾）とある。この「同十

六日」は、文化二年の正月十六日と思われるが、出発日についてはつきりしない。藩主鍋島治茂が病に倒れ、江戸参勤の出発の時期も迫っているうえ、長崎ではオロシヤ船（使節レザノフ）が昨秋から停泊したままで佐賀藩としては気が抜けない時期であった。

山領はこういう事情を含み、幕閣の指示を受けるべく江戸に派遣されたのである。彼はこのあと前記佐賀からの書状でもわかるように、「文化九年六月二十七日」以前に佐賀に帰っていた、中野好夫は山領の帰佐は「文化八年の早春」とみている。この間、山領主馬は江戸に滞在し、司馬江漢に「予の友として善」と言わせるまで友情を深めていたのである。

翌日、測量隊は白山町の追分から筑前街道川上道を測った。唐人町、唐人新町に木戸があり、右に願書があった、ここを抜けて草場村、三溝村、高木村、駄市河原、惣座宿とすすめ川上川の勸進橋。橋名のおこりは、川上神社の修理のため橋の渡賃銭を取ったことから、勸進橋と呼んだそれが「官人橋」と書かれるようになった（『角川日本地名大辞典 佐賀県』という。川上神社の三の鳥居の額、肥州鎮守正一位川上淀姫大明神とあり、慶長十三年、鍋島勝茂の奉建、此の淀姫神社は肥前国の一の宮、式内社である。

川上山実相院神通寺は、古義真言宗御室派で神仏混淆の頃は川上神社の座主をつとめた。測量隊は実相院の客座敷で昼休みをとった。

午後、八時半（三時）頃佐賀城下へ帰宿。神埼郡の大庄屋西川奎之允が挨拶に出、この夜は曇天で天測を止めている。

しかし伊能測量隊は前の晩（九月十九日の夜）晴れた佐賀城下で天体観測をしている。おそらくこの時の観測に基づいたものであろう。佐賀県立図書館に左の記録がある。

「日本経緯度実測（書写） 伊能勘解由 識」（10）

北極出地 肥前佐賀 三十三度一五分〇〇秒

東西里差 肥前佐賀 西五度二十四分〇〇秒

「地勢提要 各国経緯度附里程 観巢橋貞保編輯

肥前佐賀呉服町、極高三三度一十五分、

経度西五度二二分、從小倉 長崎街道 二八里十三町」

「北極出地」は極高と同じく北極星の高度で緯度である。「里差」は経度で京都を基準として「東西」経度のことである。

これを誰が何時伊能忠敬の記録から書き写したのか、末尾に「地勢提要跋」として文政七年甲申（一八二四）夏月観巢橋貞保識」とあるが、編輯の「観巢橋貞保」とこの観巢橋貞保は同一人物だろうか、もしやこの橋景保とは「高橋景保」のことではあるまいかと調べてみると、間違いなく高橋景保であった。「橋流景保」である。

「……後世江戸幕臣に此流あり。寛政系譜に《作左衛門至時（小太郎）景保（作助）云々》（『姓氏家系大辞典』（11））とある。

作左衛門至時は伊能忠敬の師であり、景保は嫡子の測量隊の元締め幕府天文方である。伊能の実測は広博で詳しいけれどもそれをを用い検閲には不便であるので、その大要を写し並びに観測地がどのような所にあるか分かりやすく、文政七年の夏、一冊子にまとめたものらしい。経度の数値に二分の誤差があるが、幕府天文方で修正したものかはつきりしない。「観巢」は景保がいくつか使っている号の一つであった。

ちなみにシーボルト『江戸参府紀行』（12）から緯度、経度を参照してみると「われわれは肥前領の首都で北緯三十三度一五分、グリニッチ東経一三〇度一八分にあたる佐賀に着いた」とある。そして京都に

ついでには「日本の天文学者は京都の天文台の上に第一の子午線を引いているが、これは東経一三五度四〇分に相当する」と述べている。シーボルト計算の佐賀の東経一三〇度一八分に相当するのは、西五度二分である。

夜の天体観測の場所が呉服町になっている。呉服町の何処に設定されたか現在のところ未詳である。

《注》

- 1 『伊能忠敬測量日記』 佐久間達夫校訂 大空社
- 2 亀絵図Ⅱ伊能測量隊は後の地図作成の助けになるよう、測量時沿線の山や川、重要な建物等を絵の上手な隊員に描かせ備忘録としていた。千葉県香取市佐原「伊能忠敬記念館」所蔵。ここでは「伊能忠敬研究会」会員の井上氏から戴いた、筑前の長崎街道を歩く会編集『伊能忠敬の長崎街道測量』所載の亀絵図（佐久間達夫著より引用）のコピーを利用した。
- 3 『塵壺』（河井継之助日記） 安藤英雄校注 平凡社 東洋文庫
- 4 良山、筑後の高良山とは、方向が逆で、肥前藤津の多良山のことではないかと思われる。左に島原の雲仙山があり、間に諫早湾の入海が深く入り込んでいる地形である。
- 5 「大津より高橋景保宛書簡（文化二年） 大津市教育委員会所蔵。伊能忠敬研究会編『伊能忠敬未公開書簡集』二〇〇四所載。
- 6 中野好夫「山領主馬と司馬江漢」『図書』岩波書店 一九七五

- 7 「無言道人筆記」『司馬江漢全集』所載
- 8 「泰国民様御年譜地取」（文化二年）『佐賀県近世史料』佐賀県立図書館

- 9 『角川日本地名大辞典 佐賀県』 角川書店

- 10 『日本経緯度実測（書写） 伊能勘解由 識』（蓮池鍋島家文庫） 佐賀県立図書館塑像

- 11 太田亮著 『姓氏家系大辞典』

- 12 シーボルト著 斎藤信訳 『江戸参府紀行』 平凡社 東洋文庫

（まつお のりしげ）

4月19日



地図の日・最初の一歩の日

（蝦夷地測量出発の日に因んで）

忠敬と江戸庶民の文化・大山講

神奈川県藤沢市

大沼 晃

平成二十一年十一月六日(金)～八日(日)までさいたま市与野体育館で「完全復元伊能図 全国フロア展INさいたま」が開催された。

小生、会場内説明員として見学者と対話中に、突然神奈川県から来たという若い男性から声をかけられ次のような質問を受けた。

「大山を測量した後、蓑毛道を利用して足柄方面へ行っているようですが、この道は狭くて足元が悪いため現在でも利用者が少ない登山道です。何故、険しい道を辿ったのですか。」「何故、大山へ登ったのですか。」等々

小生は、神奈川県民なので今までは大山には数回登っている。きついので山頂までは登らず、ケーブルカーを利用して阿夫利神社下社まで行くだけであった。また、本格的なハイカーではないので周辺の登山道を利用した経験がない。そのため質問に対して正確には答えることができなかった。ただ、次のような回答をしたが、その方は納得いかなかった顔をしていたのが印象に残った。

「伊能忠敬は敬神家です。歩いた道を辿ると大山測量後、足柄の道了尊に立ち寄り周辺を測量。さらに足柄峠を越えて富士方面に行つていきます。息抜きを兼ね測量の合間に神社仏閣を参拝し、見晴らしのいい山頂から各方面を見渡し、地図の精度を上げるために方角を測ったのではないのでしょうか。」

そこで、これではいけないと思い帰宅後調べ始めると、第八次測量時の初っ端に相模国藤沢宿から測量を始め、大山に登っていることがわかったが、何故、この季節に大山へ登ったのか等々、次々と疑問がわき上がり、疑問解消のために前田編集長・理事より測量日記の写しを入手し、日記の字面の裏側を読み解くことに努めた。専門の研究者からお叱りを受ける覚悟で、素人なりの推論を交えての一考察を書き上げたのでお読み願いたい。

測量日記から読み解く大山までの道筋

第八次測量日記に「九州測量日記」と副題が記述されている。測量の主眼は九州・中国で、文化八年(一八一七)十一月二十五日から文化十一年五月二十三日まで日数で九十七日間(約二年半)、距離で一万三千キロメートル強を踏破している。【注・筆者注釈挿入文】

十一月二十五日(現在の暦で新年一月初旬ごろに相当か)

黒江町の自宅を朝の七時ごろ総員十人(忠敬・内弟子尾形・箱田・保木、侍加藤・宮野、傘取佐助・甚七、草履取清兵衛、長持宰領久保木)で出立し、富岡八幡宮に立ち寄り旅の安全や測量の成功を祈願している。品川宿で別働隊六人(坂部・永井・今泉・門谷、他草履取)と合流し、総員十六人で東海道を上り、夕方の四時ごろ神奈川宿の葛谷善左衛門と上総屋長左衛門へ分宿している。

【分宿する理由は日記に記述されていないが、忠敬一行と坂部一行の同行者たちの上下の人間関係で連携をとるため、それぞれ別々に泊まったのかもしれない。】

十一月二十六日

まだ明けやらぬ六時前に神奈川宿を出立し、保土ヶ谷、戸塚を経てお昼ごろ藤沢宿に到着。吉田屋仁兵衛と平野屋甚七に止宿。

【おそらく翌日以降の準備や打ち合わせの時間をたっぷりつくるために足を早めたのではないだろうか。さて、会報五八号で取り上げているが伊能測量隊は十年前の享和元年四月二十二日に江の島に止宿。第八次測量の折、小生の住む藤沢のと真ん中に止宿していたとは今まで知らなかった。そこで、藤沢市文書館へ出向き、藤沢宿の復元絵図を調べると平野家は陣屋内に、吉田屋は脇本陣内にある旅籠であることがわかり、測量隊の一行は厚待遇を受けていることが分かった。藤沢宿は江戸から数えて第六番目の宿場町で、東海道五十三次整備以前から遊行寺の門前町として栄えた。陣屋の裏には徳川將軍家の宿泊施設である藤沢御殿があった。】

十月二十七日

この日が測量の初日であると特記している。先手組（坂部・今泉・門谷・佐助）は早立ちをし、後手組（忠敬・永井・箱田・保木・甚七）が六時ごろから宿近くの大鋸町から測量をはじめている。日記には歩く先々の詳細な町名や領主名が明記されている。また、先手と後手の測量分担が記述されており、先手は先行し東海道から大山街道へ分岐する地点から本目の宿泊先である田村の渡し（現平塚市田村、相模川に架かる神川橋付近）まで分担。後手は、大鋸町から分岐点に当たる四ツ谷まで担当。止宿先は松屋与左衛門と烏屋甚五左衛門とのこと。その晩に星空を観測している。

【現在の住宅地図と照らし合わせても地名変更などがあるため日記に記述されている地名と合致しないので、文化三年に作成された「五街道分間絵図」の東海道藤沢宿部分（図1参照）を見ると忠敬の記述の通りである事が分かる。

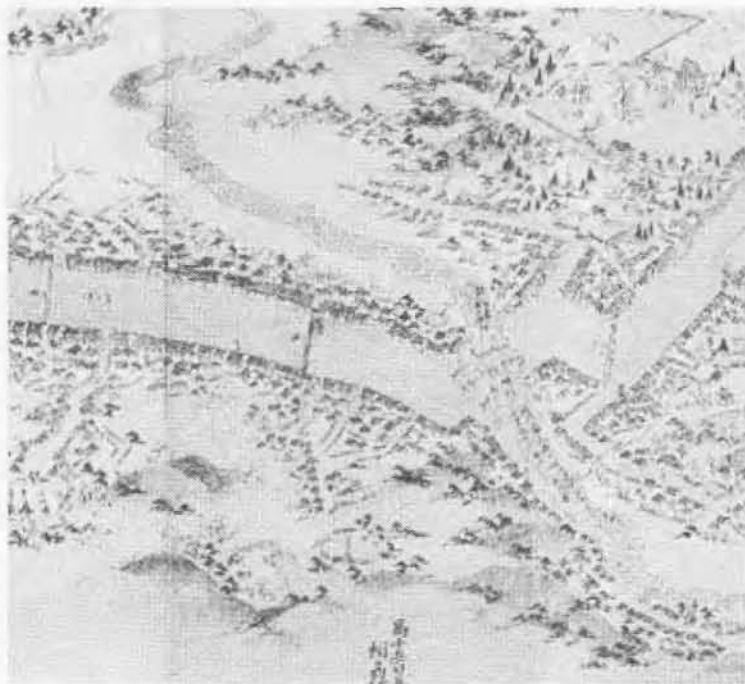


図1 五街道分間絵図 藤沢宿

「大鋸町（だいきり）」は戦国時代の後北条氏の配下の「オガ引衆」の頭がいたことによる名称で、現在は大鋸と西富に分かれている。大

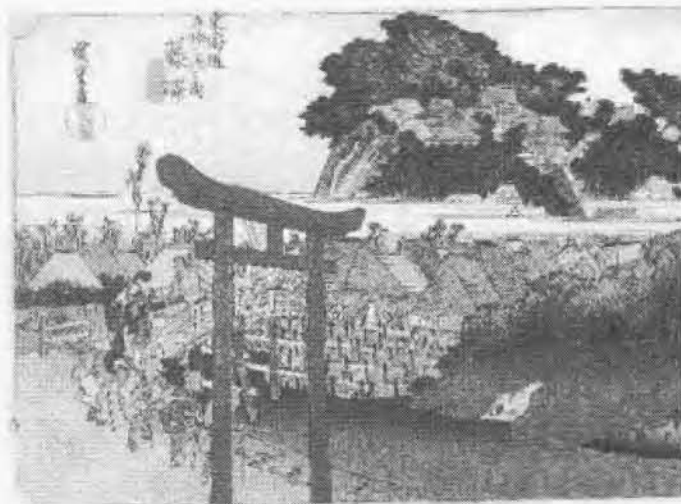


図2 安藤広重 東海道五十三次より「藤沢宿」

船にあった後北条の玉縄城や藤沢山遊行寺の造作および造船などを請け負う職人の町であった。

「境川」のことを忠敬は「界」の文字を当てているが、正しく遊行寺の門前流れる川は国の境であり、この時代、大鋸橋「現遊行寺橋」の江戸側大鋸町は相模国鎌倉郡、京都側の大久保町・坂戸町は同国高座郡である。最近、古文書の解説が進み、境川の河口には湊があり、江戸や房総より物資が金沢湊經由で片瀬湊に陸揚げされたことが分かった。逆に、この地で獲れる相州小麦や大豆は品質がよくて人気があり、房総の野田や遠くは常滑の盛田酒造まで運ばれていたようだ。

「大鋸橋」は広重の東海道五十三次之内藤沢（図2参照）に描かれており有名である。

二代目、三代目広重も浮世絵にこの場所を取り上げている。浮世絵を少し解説すると、画面左下の鳥居は江の島道の第一の鳥居で按摩さんが四人で江の島詣で行く途中であることが分かる。江の島で弁財天様のご加護により杉山検校が管針を考案したことにより、それ以来弁財天様にあやかり按摩さんたちのメッカになったようだ。右上の小さい山の上の建物群は遊行寺である。中央の家並みは大鋸町。橋の中央にいる法被を着た人たちは大山参りに行く人たちであることが分かる。何故かというと、先頭の人が担いでいるものは石尊大権現に奉納する納め太刀（おさめたち）であるからである。

江戸から大山への主要参詣道は、矢倉沢往還（現在の国道二四六号に沿った道）と中原街道および東海道を利用する三つのルートがあった。（図3参照）通常、往路は矢倉沢道を利用し大山に詣で、帰路に藤沢や江の島に回り、精進落しをしてから江戸へ帰る旅人が多かったようだ。

伊能忠敬はかなりの事前調査と準備をした上で東海道ルートを選んだ気がする。そのルートは「田村通大山道」と言われ、藤沢宿の西方四ツ谷で東海道から分岐（図3参照、現在も大切に保存され、分岐点に鳥居と不動道印石がある）——之宮（寒川町）——田村（平塚市）——田村の渡し（相模川）——伊勢原（伊勢原市）——上粕屋（伊勢原市）——子易（伊勢原市）——大山至るコースである。多少脱線するが田村道はほぼ一直線の道で、不思議に思い調べてみると古東海道であることが分かった。律令制度時代の国道は、駅家から駅家まで限りなく直線に作ったのである。」

十月二十八日

先手組は五時ごろ出立。後手組は六時ごろから田村村から測量（組み合わせは前日と同じ）を開始し、枝横内村—大島村—下谷村—小鍋島村—沼目村—平間村—大竹村—伊勢原村まで測量。先手組は、伊勢原村から板戸村—上粕屋村—白根村—田中村—子安村—大山町まで測量。成田庄太夫に全員止宿でき便利で好都合であり、家作が良かったと満足している。ここでも夜晴天測る。

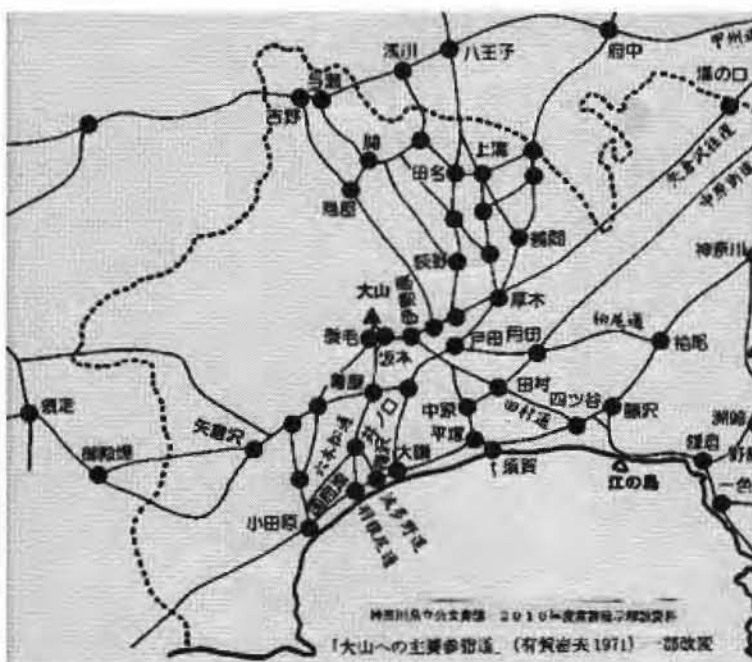


図3

【田村の渡場跡の碑は、大山を眼前に見ながら神川橋を渡ると平塚側左相模川沿いにあった。土地の古老の説明によると、昭和二十五年ごろまで渡し舟（全長六〇七m）が行き来しており、自宅の二階からその光景を毎日見ていたそうだ。現在は、砂利採集のため川床が大きく下がったので、昔の面影は全く無い。当時、船頭さんをやっていたという重田さんの脇を通り、八坂神社に案内される。現在は、神主不在の神社氏子三百名ほどであるが田村の鎮守として創建は古く、かなりの歴史があるとか。境内に大きな田村ばやしの石碑があり、平塚市の無形文化財の指定を受けている。昔、お祭りは、少し先の旧田村十字路（田村道と中原街道が交差するところ）周辺の商店街を山車が巡行しにぎやかだったが、今は交通混雑を避けるため境内でやっているとのこと。十字路わきの商店街の前身は、街道を行き来する旅人向けの茶店で、大層繁盛したそうだ。その名残だろうか和菓子屋井筒屋さんの田村最中は歩き疲れた筆者にとって大層美味しく感じた。

全員揃って止宿したとの記述から本来であればひとつの宿に全員宿泊したかったが、藤沢宿も田村宿も宿の規模の関係で希望がかなわなかった可能性がある。大山の宿は、大勢の参拝客を対象とする規模の大きな宿坊だったのかも知れない。】

十月二十九日

全員で宿を立ち奥不動まで測る。大山新町—別所町—福永町—開山町—稲荷町—前不動へ出る。そこから男坂（急峻な登山道）と女坂に分かれるが、一行は女坂を登り来迎院で小休止。その後、奥院不動堂まで測る。後ろに三社あり。一社は蔵王権現、富士浅間、毘沙門天な

り。一社は加嶋大明神、明王大権現、石尊大権現なり。一社は熊野大権現、山王二十一社、天照皇太神宮なり。山頂に石尊あり。奥不動より登ると距離にして二十八町（約三キロメートル）。六月二十七日山開き。七月十七日参詣。（中略）奥不動から二手に別れ、忠敬一行は山頂に登り測量。坂部一行は先行し養毛村―小養毛村―田原村まで測量。田原町止宿名主儀右衛門、百姓治郎左衛門。

【伊能忠敬は大山測量の様子を旅日記風に簡素に記述している。訪れた季節は冬であるから空気が澄んでおり、山頂から南の方角を見ると眼下に相模平野や相模湾上、さらに遙か遠方に房総半島まで眺望できたであろう。また、木々が落葉しているので展望が開けており、遠くの伊豆半島や富士箱根の山々まで見渡すことが出来たであろう。展望のできる時期を選んで、今までの測量の精度をあげるために山に登り、方角を確かめたいという以外に、別な意図が隠されたわけがありそうな気がした。

そこで、東博所蔵伊能中図原寸複製「伊能図」を調べたら二十六頁に次のような記述があることに気がついた。〔前略〕この旅の前に忠敬は「大切な書き物」と題して、今後への実務的な教訓と、忠敬の隠居資金約一千百両の分配を記した書状を書き残しています。万一にも覚悟した出発でした。以下略〕何と六十九歳にして二年半に及ぶ長旅を計画したのだから、歳が歳だけに旅の途中で倒れても不思議ではない年齢で多分遺言書の類であろう。

私的な旅として三十三歳の時に妻達と奥州松島へ、四十八歳の時に近隣の人たちと関西旅行を楽しんだが、その後は測量人生一筋で各地を巡っただけである。当時の江戸は、旅文化が盛んで大山詣でや富士詣で湧いていた。忠敬とて仕事一筋の朴念仁ではないから測量の合間

に、靈験あらたかな神社仏閣めぐりをし、冥土の土産にしたいという考えが浮かんでも決して不思議ではない。

江戸の庶民を沸き立たせた大山参りについて調べると、忠敬と意外な隠れた接点があることに気がついた。その源となったのは一枚の浮世絵（国芳の東都名所 両国の涼Ⅱ図4参照）で、絵の右下が水垢離を取る大山参りの人々。手に持つのは「納め太刀Ⅱ木で作った太刀で（奉納 大山石尊大権現 大天狗 子天狗 所願成就」と銘を入れたもの」で、大山に行く前に両国に垢離場があり、ここで水垢離を取った。一週間ここで精進潔斎をし、納め太刀を持って旧暦の六月二十七日から七月十七日までの二十日間（現在は七月二十七日から八月十七日）の参拝時期に出かけた。測量日記に記述している通りである。

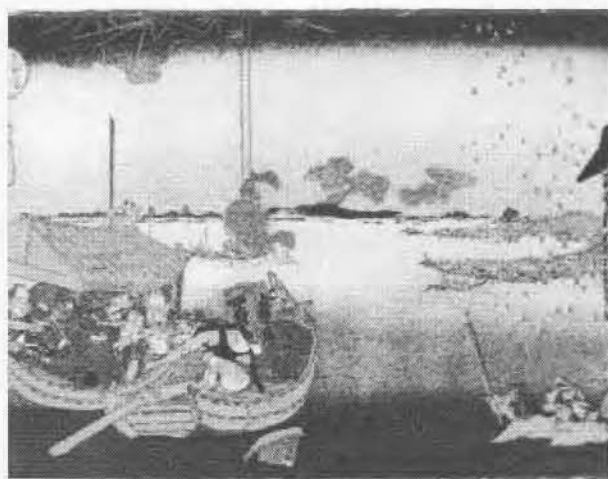


図4 歌川国芳 東都名所より 両国の涼

忠敬は、寛政七年（一七九五）五十歳に江戸へ出てきて深川黒江町（現在江東区門前仲町一―八）に住ながら永代橋―大橋―両国橋―蔵前橋と川筋に沿って上り、蔵前橋通を左に曲がり厩局まで通っていたので、何回も浮世絵で描かれている光景を見ていただろうし、常日頃、忠敬は当時の観光案内絵図（大山詣、富士詣、富士川下り）にも目を通していたのではないだろうか。その理由は、第八次測量の出だしのルートは、これらの観光案内絵図に描かれているのとあまりにも似ているからである。忠敬は敬神家であり、人一倍好奇心が強い人であるから機会があれば大山に詣でて、伊能家の子孫繁栄を祈願したいと思っていたのではないか。」

ここから神奈川県にあまり馴染みがない会員に向けて脱線を覚悟で「大山詣と石尊大権現」について神奈川県立公文書館二〇一〇年度常設展示解説資料（郷土資料グループ 小澤昭子氏作成）を使い要約しながら解説を試みる。

『大山は神奈川県西部に連なる「神奈川県屋根」ともいわれる丹沢山地の一部で、その東端に位置する。標高は一二五一・七m。江戸時代は「相州大山石尊大権現」と呼ばれていた。現在の名称は「大山阿夫利神社」「雨降山大山寺（あふりさんだいさんじ）」。

古代から中世にかけて大山は関東有数の修験の地であり、江戸以降は徳川家康の宗教政策によって、大山を下山した修験者（山伏など）が「御師（おし）」となり、その活躍によって大山信仰は関東近郊の一般庶民に広まり、大山詣のための「大山講」が組織された。慶長十年（一六〇一）徳川家康は大山の統制に乗り出し、二五口の「清僧」と認められたもの以外の「無学不律」の僧（山伏など）を山内から追放し、前不動より上を結界の地と定めるとともに、大山を古義真言宗の

教学道場とした。この時追放された僧たちが大山の東側の坂本（大山町）や西側の養毛に定住し、「御師」の中核となり活躍した。江戸後期に山頂に本宮として石尊社、中腹に雨降山大山寺の中心である不動堂、その少し下には別当八大坊、供僧十一坊等が軒を連ね、山麓には前不動堂が配置された。江戸期を通して幕府は社殿の造営や修理を行ったようで、大山は幕府にとつて重要な存在であった。御師たちは関東一円とその周辺諸国に大山の信仰を布教したため、最盛期の宝暦年間には年間二〇万人が参詣に訪れたと言われている。先にも触れたように参拝の時期は旧暦の六月二十七日から七月十七日までの二十日間で、その期間に限って山頂の石尊社への参拝が許された。（それ以外は不動堂まで）しかし、女人はこの期間中も石尊社の参拝は許されなかった。このように庶民の間にも大山に対する信仰が深まり、豊作祈願、無病息災、家内安全、招福除災、商売繁盛などの祈願のために大山に詣でる人々が増えた。』

【測量隊が宿泊した先は御師たちが経営する宿（全員が泊まれるほどの規模を有する）であったと思えるし、地理に明るい先達たちによる道案内も受けたのではないだろうか。また、地図を作成するという大義名分があるので参拝できる時期ではなかったが、幕府の計らいで結界である山頂まで登ることが出来たようだ。】

最後に、明治元年（一八六八）太政官布告（神仏分離令）によって雨降山大山寺の山号が廃止され、この地に阿夫利神社が建設されることになったため、不動堂を中心とする八大坊と供僧十一坊は破壊された。これに伴って前不動は追分社と改称された。（大正五年旧寺号に復す）一方、山頂の石尊社は石尊大権現の名を廃して大山寺から独立し、

阿夫利神社と改称された。(県公文書館資料「大山詣と石尊大権現」より引用)

故に、現地を訪れても当時の浮世絵(図5)に描かれた光景が、そのまま残っているわけではないことを理解した上で、忠敬の足跡を求めての旅に出かけてほしい。(次号：忠敬と最乗寺・道了講に続く)

(おおぬま あきら)

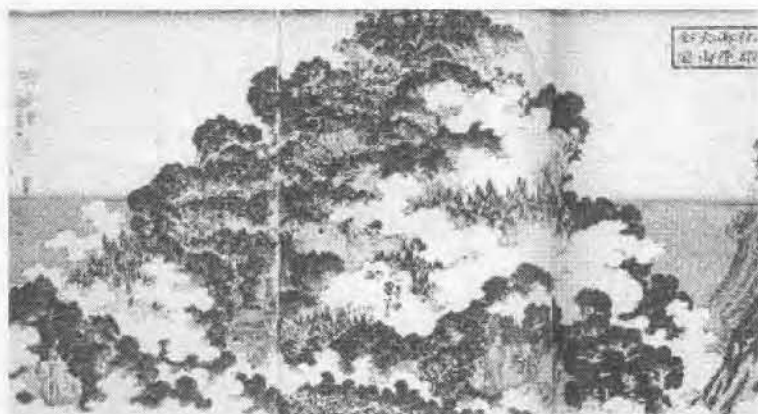


図 5

話題

「大河への道」―志の輔らくぐ―

鈴木純子



先日の記念例会で伊能忠敬の大河ドラマ実現にむけての協力体制が確認されたが、時あたかもNHK「ためして合点」でもおなじみの落語家志の輔さんの新作落語「大河への道」が高座にかかった。

「志の輔らくぐ」 in PARCO (二〇一

一年一月、東京渋谷・パルコ劇場)でのこと。三時間あまりの独演で三席、古典の「だくだく」、新作の「ガラガラ」につづく三席目である。

落語向きとはいえない題材であるが、講談風の運びとして九〇分近くを演じたという。

その狂言まわしとして登場し、落語の味付けをする役割を担ったのが、地域興しのために郷土の偉人伊能忠敬を大河ドラマにしようとする千葉県職員、江戸と現代とを行き来しながら感動のサゲとなり、最後に伊能図と衛星写真の日本の姿が映し出されてゆっくりと重なり、伊能図の驚くばかりの正確さが、斬の感動をより深くするという趣向だそうである。研究会も大河ドラマ実現をめざそうとしているこの時期、興味引かれる話題である。筆者は残念ながら、劇場に足を運んだわけではないので、内容についての紹介は、一月二六日付の朝日新聞夕刊の記事によった。「構成は落語でも講談でもない。あえて言えば、つい聴き入ってしまう面白い話芸」と記事(篠崎弘)は評している。

前半の二席は四月中に WOWWOW で放映され、「大河」はおなじみ WOWWOW で秋に放映予定とのことである。高座に行ければ何よりだが、せめてテレビを見落とさないようにと思っている。

伊能大図総覧の地名と景観(十五)

星 埜 由 尚

高山から野麦峠を越えて松本まで

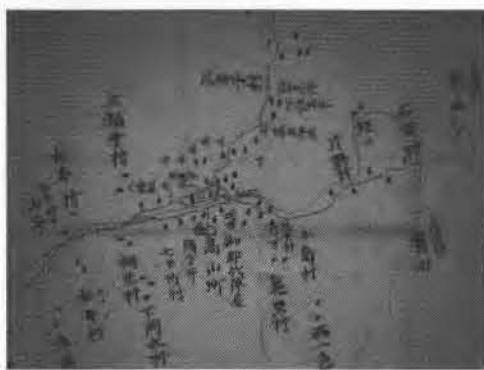
高山から野麦峠を越えてきた伊能測量隊は、文化十一(一八一四)年四月二五日松本城下に着いた。長期にわたった第八次測量も終盤に近い。松本は、松平丹波守六万石の城下町である。文化十一年当時は、

戸田(松平)光年^{みつね}の治世下であった。高山は、天領で大図にも御郡代

屋敷と書かれた躰が二棟描かれている。測線が屋敷まで短く分岐して引かれているのが分かる。

「測量日記」によると、四月一六日に久々野宿を出発した一行は、手分けをし、宮村と石浦村の境に先手が打った石印の杭から後手は初め、高山町の宮川中橋の左欄干に繋いだ。欄干から陣屋門前までは四五間とあるので約八一mである。郡代は榊原小兵衛と言った。宮川中橋の幅は二〇間即ち約三六mである。中橋を渡り、越中街道と信州街道の追分三ノ町に三印の杭を打ち、打ち上げとする。大図を見ると、久々野から高山に入り最初に宮川を測線が渡っているところに宮川中橋が架けられていたのであろう。高山では、本陣と脇本陣に分かれて宿泊した。

翌日には高山町を手分けして測量した。まず宮川中橋の欄干から始め、越中街道を測った。大図を見ると、越中街道は宮川の左岸を通っていたことがわかる。この辺りは、三ノ町のうち、向町字上向町と言った。ここから国分寺に向かって測線が分岐している。国分寺は七日



大図 112号高山付近(アメリカ議会図書館蔵)

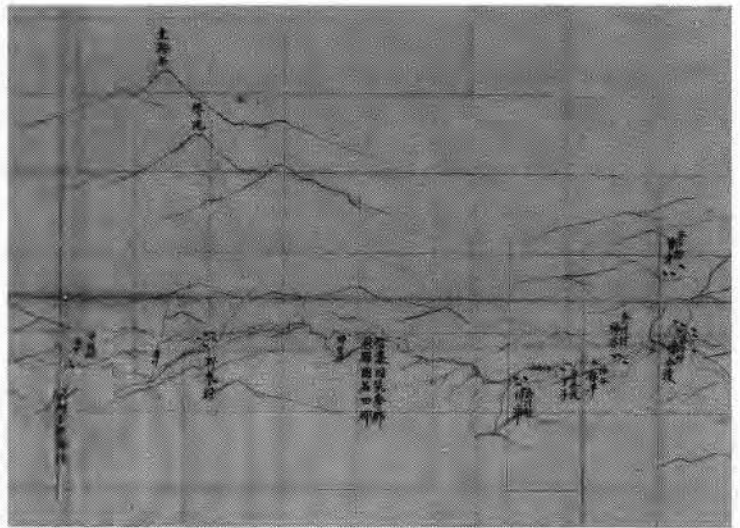
町村に属し医王山国分寺と称し、本尊は薬師如来である。

国分寺には天平時代の七重塔が当初存在したが、八一九年に火災で焼失し、その後江戸時代になってから元和元年に三重塔が再建されたが再び暴風雨で倒壊し、文政四年に再建された。伊能測量当時は、七重塔も現在見られる三重塔も存在しなかった。「測量日記」にも塔のことは書いてい

ない。現在の三重塔は岐阜県重要文化財に指定されている。本堂と本尊は国指定重要文化財である。

七日町村から桐生村に向かい、途中に鍛冶橋とある。桐生村の川端

に玉印の杭を残し、本母村で神通川(地図では宮川)松本橋を渡り、松本村の川端に先手が残した古印の杭に繋いだ。松本橋は長さ十九間(約三四m)である。越中街道は、ここまで中橋欄干から二五町三一間一尺で、約二七八〇mである。桐生村の玉印の杭から神通川の板橋長さ約百十八mを渡り、大八賀郷三福寺村に出る。宮川左岸を戻り、八幡宮へ測線を分岐する。八幡宮の分岐には一ノ町五印の杭を打った。五印の杭から測線の突き当たりまで一町四四間(約百八十八m)あり、突き当たりには十印の杭を打った。十印の杭の手前には二の新橋があり、板橋で四軒半(約八m)の長さである。大図には表現されていない小水路と橋である。



大図 109 号野麦峠付近 (アメリカ議会図書館蔵)

〔十〕印の杭から止宿「鍵屋」

を通り、中橋の三辻〔三〕印の杭に繋ぐ。この間が七町三間(約七百六十八m)

である。〔三〕印の

杭から信州街道を野麦峠の方に向かい、隣の江名子村の境まで測る。途中一ノ

町の三辻に〔四〕印の杭を打つ。

〔四〕印の杭に戻り二ノ新橋の南

詰〔十〕印の杭ま

で五町十二間五尺(約五百六十七m)、途中照蓮寺に分岐する。照蓮寺は、東本願寺掛所輪番で光耀山照蓮寺といい、白川郷十六ヶ村に除地があり、二百三十六石余を領していた。

照蓮寺は、親鸞聖人の弟子嘉念坊善俊かねぼんぜんしゆんが開いたと言われ、室町時

代には戦乱により焼失したが、白川郷に再建され光耀山照蓮寺と称した。その後、豊臣秀吉の命により飛騨を治めた金森長近は、照蓮寺を高山に移転し、堂宇を整備して照蓮寺は大いに栄えたが、金森氏の転

封の後は衰退し、本山東本願寺の掛所「高山御坊」となり現在に至っている。明治以降は、真宗大谷派高山別院光耀山照蓮寺と称している。

一方、照蓮寺の移転の後も白川郷には正蓮寺開基善俊の墓と本堂が残り、「照蓮寺掛所心行坊」として存続した。明治以降は、同じく照蓮寺を名乗ったが、御母衣ダムの建設に伴い高山に移転した。高山には、二カ所の照蓮寺が存在する。伊能大図に表示されているのは高山別院の方である。

高山の測量が終わると、二手に分かれ、副隊長格の永井要助のグループは、古川まで測量する。「測量日記」によれば、古川二ノ町通り人家の限、右側の人家に向かい左の柱に繋ぐ、富山まで十八里となっている。富山まで測量すれば、太平洋側と日本海側を繋ぐ横切測量となったはずであるが、なぜ古川で打ち止めにしたのか疑問の残るところである。

高山から野麦峠を越え、木曾の藪原に出て松本に向かった。野麦峠は、千六百m余りの峠で、最高所水準点のあるところでもあるが、伊能測量においても最高所であった。野麦峠までは飛騨川を遡り阿多野郷と呼ばれる山深い地域を行く。高山町から山口村、尾上峠、阿多野郷辻村、と山を越え飛騨川に沿う見座村、甲村で止宿する。甲村からは、飛騨川に沿い、黒川村から支流の秋場川に入り、小瀬ヶ洞村、

きびうたにむら

黍生谷村と山村らしい村名の村を通る。小瀬ヶ洞村は、ダムが造られ

現存しない。湖底の村となったのであろう。黍生谷村から再び猪ノ鼻峠を越え山の斜面に立地した猪鼻村を通過して中之宿村に止宿した。

中之宿村では天測を行った。中之宿村から飛騨川に沿って上流に遡り、下向村、日影村、上ヶ洞村を通り、また寺ヶ坂峠を越えて野麦村に達した。途中の日影村も現在ダム湖となっており現存しない。高山から



大図94号松本付近 (国立国会図書館蔵)

ある。大永七(一五二七)年に三村民部少輔源忠親により開かれたとされている。本山は能登総持寺でその末丹波国永沢寺、その末越前沢良慈眼寺、その末福井心月寺、その末当長興寺と「測量日記」には記されているので、大変な末寺だが、何故この寺まで測ったのかその理由は分からない。犀川の琵琶橋(幅約二五m)を渡り、一七町二四間(約一、九km)の測線とその先に寺院の麓が描かれている。

野麦村まで、日記には記されていないが、山を越え谷を廻り相当な難路であったものと思われる。測線の屈曲が相当激しいことからそのことが推し量られる。飛騨川に沿って、何回も兩岸を行き来して橋を渡っており、橋の幅も詳しく測量していることが日記には記されている。

野麦峠を越え、寄合渡から萩原宿に達して第七次測量の測線に繋いだ。萩原は、戸数百七十軒の中山道の宿場である。萩原から洗馬宿までは、無測で進み、洗馬宿から先手は塩尻まで無測で、松本道を測り、後手の忠敬組は、善光寺道を測る前に本洗馬村の長興寺に分岐する測線を測っている。長興寺は、「測量日記」によれば、「曹洞宗越前国福井心月寺末青松山長興寺」と言い、御朱印高十五石、本堂十八間に八間と言うから約三十m×十五mの大きな本堂である。大永七(一五二七)年に

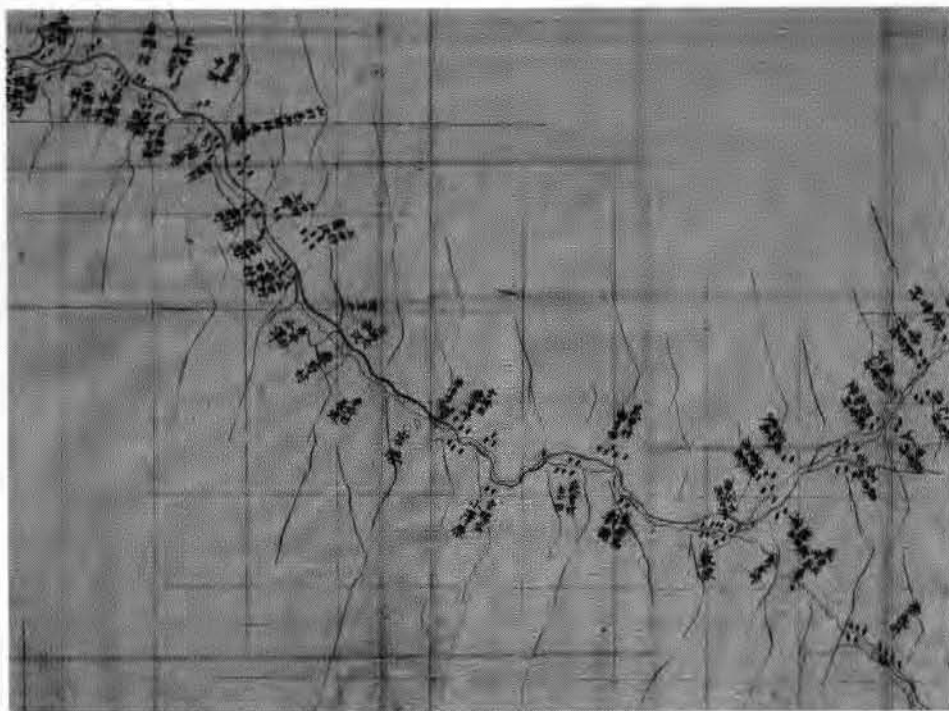
一五日洗馬宿を出立した一行は、村井宿に一泊したのち松本まで測進して行く。松本は、松平丹波守六万石の城下で「測量日記」には、家数三千六百軒と記されている。寺町を測量していったようで、一向宗極楽寺、浄土宗生安寺、法華宗本立寺、一向宗長唱寺、宝栄寺、浄土攝取院と言った寺院名が「測量日記」には記されている。大図には、大図九四号松本付近(国立国会図書館蔵)「薄川、長沢川、女鳥羽川の三本の川が描かれ、それぞれに川の名前が記されている。薄川には、十二間の土橋、長沢川には六間の土橋、女鳥羽川はどのような橋が架かっていたのか記述がないが、八間と記されている。長沢川の橋から本町五丁目木戸と書かれているので、長沢川は城下の境で木戸があったことがわかる。女鳥羽川の手前に本立寺があるのでそのあたりには寺院が多かったであろう。現在も女鳥羽川に沿って松本城の西と南に当たって寺院が並んでいる。薄川と女鳥羽川は現存するが、長沢川は地形図には描かれていない。幅六間即ち十m程度の幅の川は明治以降に暗渠になってしまったのではないだろうか。

木曽路

文化六(一八〇九)年8月に江戸を出立した伊能測量隊一行は、中山道を通り十月には木曽路にやってきた。木曽路は、木曽山脈と美濃・飛騨の山地に挟まれた木曽川の作る狭く険しい谷を伝う道である。信濃川や天竜川に沿う谷は幅広く河岸段丘が発達して平と称される長く幅広い盆地となっているのに比べ、木曽谷と称されることく、木曽川に沿っては広い河岸段丘の発達もそれほどではなく、先行谷となつて急傾斜の谷壁が発達し、平地が少ない。

北の贅川宿から馬籠宿まで木曽十一宿と称された。伊能大図にも十一宿全て記載されている。十月一日に贅川宿を経て奈良井宿に泊まり、

宮越宿、福島宿、上松宿、須原宿、野尻宿、三富野宿と止宿して八日に馬籠宿に着いた。



大図 109 号奈良井～福島（アメリカ議会図書館蔵）

一 費川宿～奈良井宿一

費川宿から奈良井宿までは途中で平沢を通る。日記には、家数十件前後の字名がいちいち記載されている。その中で平沢は、奈良井宿に属すが、家数百三十二軒と大きな集落で、奈良井宿に匹敵する大きさの集落であった。平沢は塗り物・木地を製すと記されている。

平沢は、現在も木曾漆器の産地として有名で、漆器工場や木工場が多数あり、集落之旧木曾街道を歩くと漆器の店が多い。漆工町として古い町並みをよく残し、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。表通りに店が並び、その裏には漆工職人が住み漆作業場があった。

平沢から奈良井宿まではわずかの距離である。奈良井宿は、家数の記載はないが大きな宿場である。資料²⁾によると家数四百軒人口二千人以上であったらしい。奈良井宿も挽物・塗物が多いと日記には記している。木曾漆器の伝統は現代まで廃れていないのは幸いである。奈良井宿は、犀川の上流奈良井川の狭い谷の河岸段丘上の山裾の決して条件のよいとは言えない所に立地している集落であるが、平沢と一体をなして漆器産業で潤いあわせて五百軒を超える家とおそらく三千人に近い人口を養うことができたのであろう。奈良井宿は平沢と同様に重要伝統的建造物群保存地区に指定され、古い宿場の姿をよく残し、多数の観光客で賑わっている。

一 奈良井宿～宮腰宿一

十月二日奈良井宿を先手後手に分かれ出立すると日本海と太平洋の分水界鳥居峠を越える。日記には峠に茶屋二軒と書いているが、現在はトンネルで峠の下を短時間で通過してしまう。鳥居峠を越えると藪

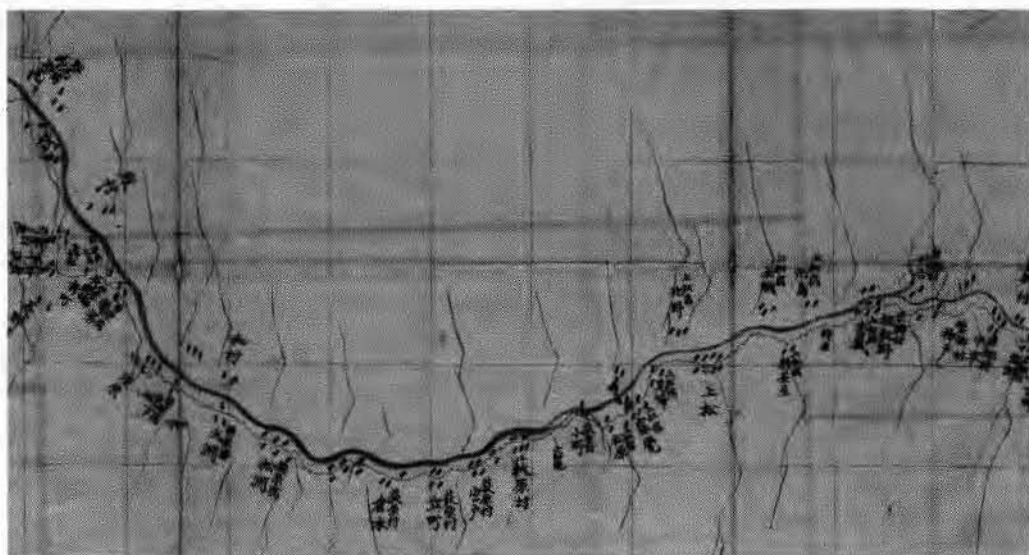
・天保年間「宿村大概帳」

原宿である。萩原宿では本陣で昼食を取った。萩原宿は、お六櫛、挽物細工多しと日記に記している。お六櫛とは、「みねばり」という木を細工して作った櫛で、お六という娘が頭の病をみねばりで作った櫛で梳くと治るとのお告げを御嶽大権現に頂き、早速その櫛で朝夕守を梳いたところ、たちどころに治ったことから萩原宿で櫛を作りお六櫛と言って売り出したのが始まりと言われている。日記によると奈良井宿でも作っていたようである。お六櫛は現在も高級な櫛として生産されている。

萩原宿から木曾川を三回渡り点々と木曾川に沿う集落が続く。宮腰宿近くには、木曾義仲の古城跡、「山吹山已淵」があると日記には記述されている。木曾川は蛇行しているので、瀬と淵が交互に現れているが、そのうちの大きな淵に「山吹山已淵」と名付けられていたのであろう。現在この地名が残っているのか筆者には不詳であるが、山吹山という山があり、国道や中央本線の山吹トンネルも通っている。山吹山の斜面を刻んで流れる木曾川にできた淵であると考えられる。なお、「山吹山已淵」は、「山吹山之淵」ではないかと思うがいかがであらうか。また、日記には字名の德音寺の帆か、特に述べられてはいないが、大図には德音寺の躰が描かれている。德音寺は、木曾義仲の菩提寺として霊廟があり、木曾一族の墓がある。

一 宮腰宿と福島宿

測量隊は二手に分かれ、忠敬の方は、福島宿に直行し下図や測量成果の整理を行った。坂部貞兵衛の手は、福島宿まで淡々と測量し、木曾代官山村甚兵衛の代官屋敷まで測量した。大図には、山村甚兵衛陣屋として豪壮な躰が木曾川右岸に描かれている。山村氏は、木曾氏の家臣であったが、関ヶ原の戦いで徳川方に付いたため、木曾の支配を認められ、木曾は尾張藩の領知であったが、福島宿の関所の守りと木



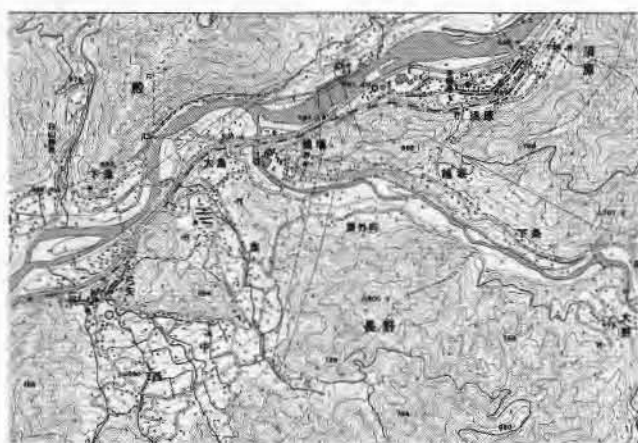
大図 109 号福島～須原 (アメリカ議会図書館蔵)

曾代官として権勢をふるった。山村氏の下屋敷と庭園は現在も残っており公開されている。木曾川を挟み福島宿の宿場町の対岸には山村代官屋敷の豪壮な邸宅があった。

一 福島宿と上松宿

福島宿から二手に分かれ上松宿まで木曾川左岸を測量していく。

最大で家十軒程度の小さな集落を次々と通過する。大図にもこれらの集落が描か



二万五千分一地形図「須原」部分の縮小

れ字名が記載されている。これらの地名は、現在も地形図に残されている。この日は、上松宿を通り、宇松原まで測量した。宇寝覚は、家数二十二軒で蕎麦が名物で臨川寺があり木曾川の眺望がよろしいと日記に書いている。寝覚ノ床を眺めたのであろう。現在でも臨川寺から寝覚ノ床を眺めることができる。大図には臨川寺が描かれている。

一上松宿ノ須原宿一

上松宿を出ると萩原村に入り、宇小野に小野の滝があると日記に記されている。小野の滝は、木曾八滝の一つで、北斎や広重の浮世絵にも描かれている有名な滝であった。小野の滝の脇には茶店があり、蕎

麦切りが有名であった

そうだが、日記には特に

記述はない。須原宿に到

着後、定勝寺を訪ね唐画

数点を見せて貰っている。

定勝寺は、臨済宗妙

心寺派の古刹で、臨川寺

もその末寺である。山

門、本堂、庫裏は、安土

桃山ノ江戸初期に建て

られたもので、国の重要

文化財に指定されてい

る。須原宿では天文観

測を行い、浅草暦局と緯

度がほぼ同じであると

日記に記している。

一須原宿ノ野尻宿一

二手に分かれ、忠敬達は、野尻宿に直行し、地図仕立てを行った。

須原宿を出ると、長野村である。長野村では、それまで木曾川にほぼ並行している測線が須原宿大島で大きく南に湾曲する。長野村は現在の大桑村の中心地に当たり、長野本村で再び測線が北行し、長野村弓矢のあたりで木曾川の河岸に戻る。地形図を見てもわかるように、この測線は、木曾川の旧河道が段丘化した部分を通っている。この旧河道と現在の木曾川の間には、標高六五〇mあまりの孤立した山があるが、日記には今井兼平古城跡ありと記され、大図を見るとこの山が今井兼平の古城と伝えられていたものと思われる。今井兼平は、木曾義仲の四天王の一人と言われていた人物である。長野、大島、弓矢の地名が現在も残っている。野尻宿でも天測を行い、深川の隠宅とほぼ緯度が同じであると日記に記している。

一野尻宿ノ三富野宿一

野尻宿から三富野宿の間は、木曾川の左岸に山が迫り、河岸段丘の幅も狭い。日記には、三富野宿属の十二兼のほか通過した字名が記載されているが、十二兼の家数が十二軒であるほか、数件の小集落が点にする程度であったことがわかる。大図には羅大橋と書かれているのは羅天橋の誤りで、模写時に間違えたのであろう。日記には、片欄干ヤキ沢橋を渡ると記されているが、橋の片側のみ欄干があったのであるうか、なかなかスリルに富んだ測量であったと想像される。三富野宿

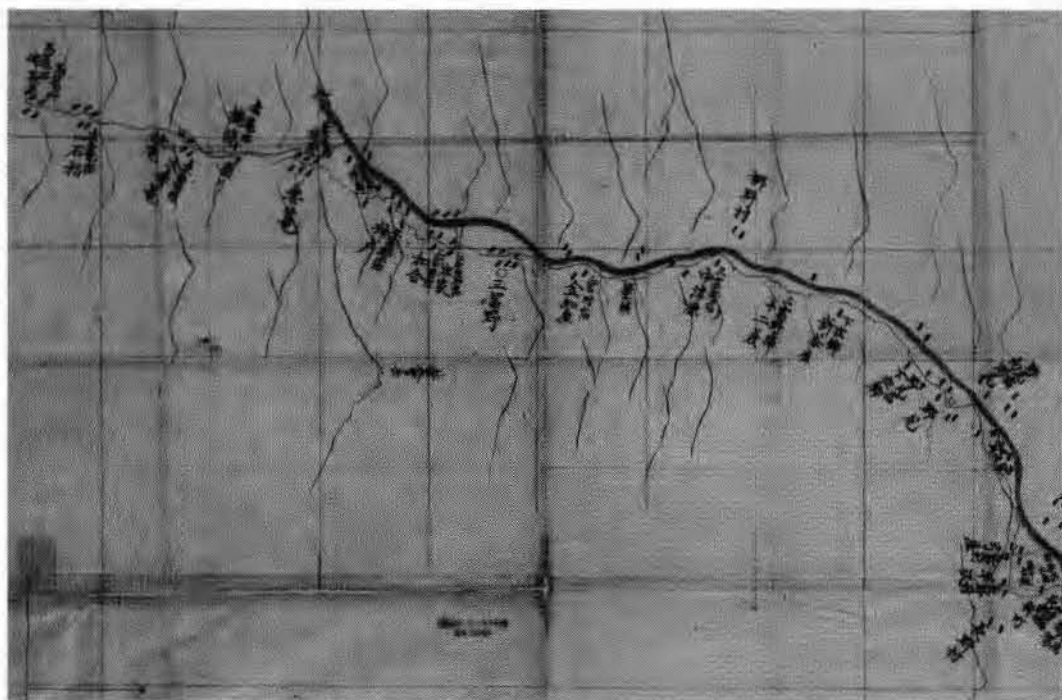
神戸まで測量し、三富野宿に止宿した。神戸には神戸観音があり、甲

石、烏帽子石があると日記には記されている。現在神戸には「かぶと

観音」があり、木曾義仲が戦勝を祈念して兜の前立の観音像を外して

祀ったものであると言われている。

三富野宿ノ馬籠宿一



大図 109 号長野村～馬籠峠（アメリカ議会図書館蔵）

三富野宿から妻籠宿を経て馬籠宿まで測量し木曾の測量は終わった。三富野宿神戸から木曾川を離れ馬籠峠を通る山道となる。妻籠宿は、中山道の宿の姿を最もよく残しており、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。妻籠宿を過ぎ、大妻籠を過ぎると雄滝・雌滝がある。大図には雄滝が注記されているのみであるが、日記には、男滝を左に女滝を右に左に小さな橋を数回渡っていくと記されている。大妻籠のさきに一石橋という集落があり、そこには尾張藩の材木役の番所があった。そこを過ぎると馬籠峠で、峠茶屋は人家三十三軒と日記に記されているので、峠にも木曾の集落としては比較的大きい集落であったものと思われる。馬籠宿は、長野県から岐阜県へと行政区域の変更があった。現在は岐阜県中津川市である。馬籠宿は明治・大正の火災により古い町並みは焼失してしまったが、復元され、島崎藤村の生地であることもあり、観光地として賑わっている。

（ほしの よしひさ・代表理事・（社）日本測量協会副会長）



研究レポート『伊能忠敬』(十一)

忠敬の見た風景(その五)

石谷春香

五日目 八月九日 晴れ

朝、部屋から外をよく見ると、今日行く横浜ランドマークタワーが
がちよつと見えます。



朝食はバイキングです。



食べたらさっそく出発です。

駐輪場まで歩きます。
八景島に来る人が多いです。
八景島を出発です。



最初に称名寺に行きます。



称名寺は「かながわ未来遺産100」「かながわの建築物100選」「かながわ橋100選」に選ばれています。

それから金沢八景の一つ「称名晩鐘」にもなっています。

称名寺は鎌倉時代に北条実時が開きました。



門のところで自転車を止めます。
中に入ると赤い橋がきれいです。

トンネルをくぐって金沢文庫にゆきます。

中学生は無料です。

金沢文庫は「かながわ未来遺産二〇〇」に選ばれています。
古いものが展示されています。



金沢文庫

神奈川県立

もどってまた出発です。

まっすぐ行って左に曲がります。

シーサイドラインの幸浦駅を通ります。



まっすぐに進みます。





周りは大きな工場ばかりです。

まっすぐまっすぐ…

右に曲がります。

そしてヨコハマベイサイドマリーナにちよつと寄り道です。

お店がいっぱいです。

まずマックで一休みです。
そしてお店に行きます。
はじめて来ました。
ショップがいっぱいです。
ここで買い物です！
ショッピング！



<http://www.bayside-outlet.com>
YOKOHAMA3OUTLET

見るのにかなり時間がかかりました。
Tシャツを何枚かかいました。
お昼になったのでさっきのマックにまたいきました。

そして出発です。

高速道路の下をずっと行きます。



20 横浜市磯子区

左にまがります。

今度は普通の道です。



ずっと行きます。

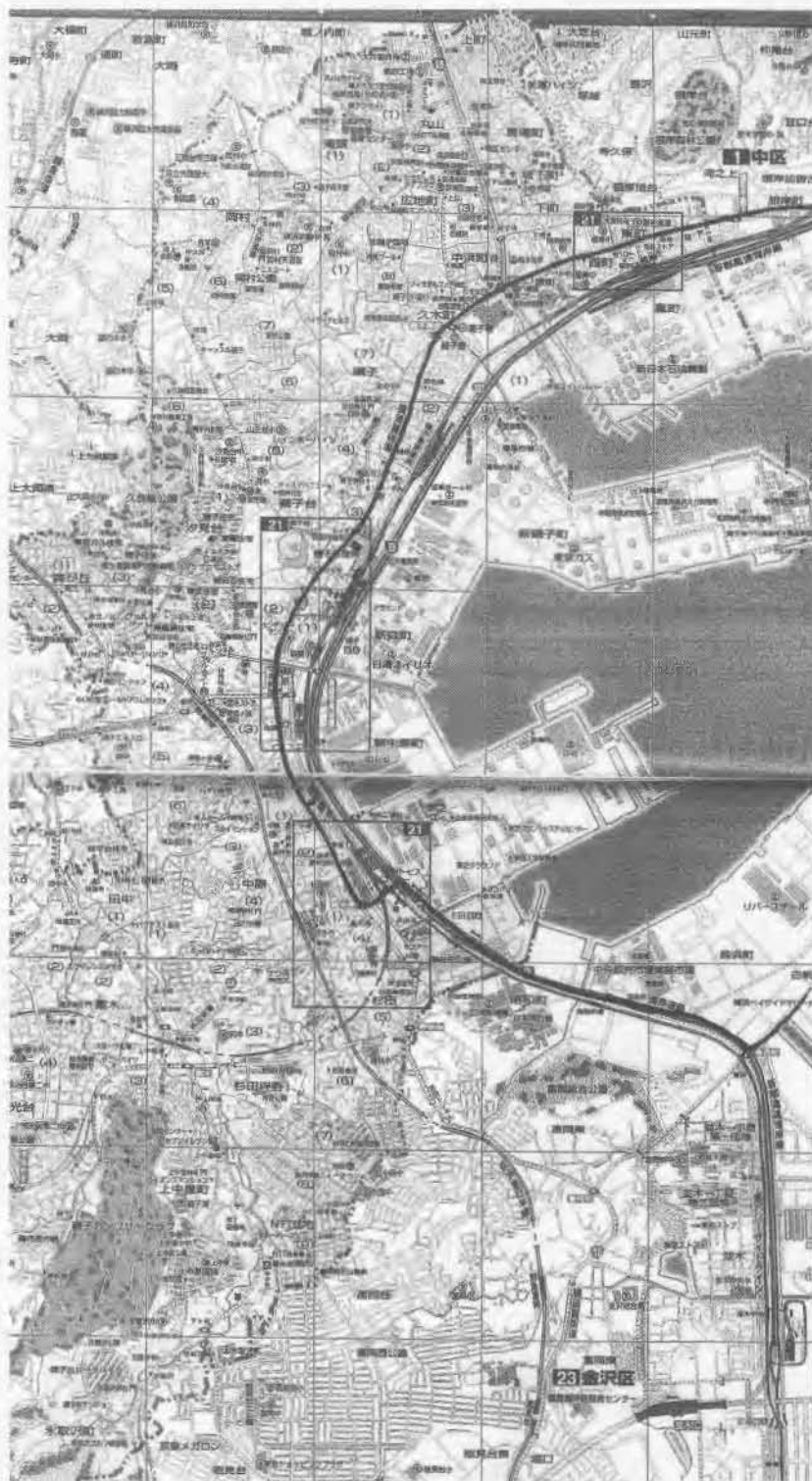
ローソンに寄ってアイスをたべます。

川崎まで20kmの標識があります。

すごいマンションがあります。

暑い…

ずつと行くと道が走りやすくなります。



21 横浜市中区

マイカル本牧があります。お店があるようですが、ここはとぼします。

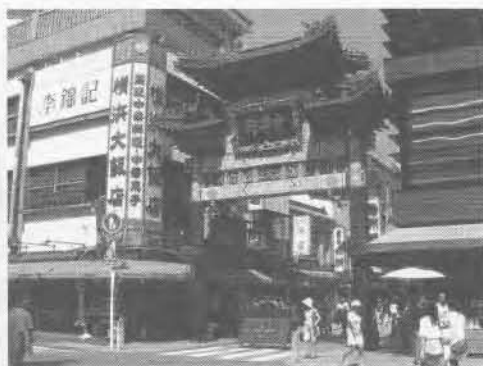
商店街をいきます。

山手トンネルを通ります。



トンネルの中の歩道が広いです。
そして中華街です。

もうここはよく知っている場所です。
中華街は「かながわ未来遺産一〇〇」「かながわのまちなみ一〇〇選」
文明開化の道として「かながわの古道五〇選」に選ばれています。
中華街の中を歩きます。



山下公園のところに歩きます。



山下公園は「かながわ景勝五〇選」「かながわ未来遺産一〇〇」「かながわの公園五〇選」に選ばれています。
神奈川県のパンプレットがたくさんある「かながわ屋」の近くを通ります。



ランドマークが見えます。

神奈川県庁を通ります。

神奈川県庁は「かながわの建築物一〇〇選」に選ばれていて「キングの塔」と言われています。



横浜開港記念館を通ります。

横浜開港記念館は「かながわの建築物一〇〇選」に選ばれていて「ジヤックの塔」と言われています。



横浜税関を通ります。



横浜税関は「かながわ建築物一〇〇選」に選ばれていて「クイーンの塔」と言われています。

この三つ合わせてK・G・Jの三塔は「かながわ未来遺産一〇〇」になっています。

赤レンガを通ります

赤レンガパークは「かながわ未来遺産一〇〇」「かながわ建築物一〇〇選」に選ばれています。
赤レンガは明治・大正時代に作られた倉庫です。
ワールドボーターズの横を通ります。
もうすぐランドマークです。



よこはまコスモワールドの前を通っていよいよランドマークタワーです。

横浜ランドマークタワーは「かながわ未来遺産一〇〇」に選ばれています。

到着です。

入口で自転車はどうすればいいですかと聞くと、「お預かりいたします。」とホテルマンの人がていねいに言いました。白いてぶくろをしていて、ていねいにもって行ってくれました。かぎはしたままです。受付にいくとなんか変です。しばらく待っていると「こちらに手ちがいがありました。」と言うのです。泊れないのかな？と思いました。



しばらくロビーで待たされました。ところでメーターを見ると、175・15kmになっていました。



しばらくしてお姉さんが来て、「こちらに手ちがいがありましたので特別の部屋をご用意しました。ご案内します。」と言いました。

エレベーターに乗ります。

おねえさんは66回を押しました。

部屋は6633です。





部屋に入ると暗いようです。
カーテンを開けようと思ったおねえさんが「カーテンはリモコンです。」
と言ってリモコンのボタンを押しました。
カーテンが下から上がってきます。

すると…

すごい景色です。

すごいです。

横浜です。

みなとみらいです。



部屋の中を見るととてもごうかです。
ずーっと走ってきてよかったです！
夜。ワールドボーターズにしゃぶしゃぶの食べ放題に行きました。
その帰りにはコスモワールドです！
大観覧車「コスモス21」に乗りました。
とても思い出に残ります。

部屋に帰って外を見ると夜もとてもきれいです！

(いしやはるか・文教大学付属高等学校三年)

「伊能忠敬の浜名湖測量紀行」受講記

賀茂真淵記念館冬季講座 講師・神谷昌志氏

加藤 忠三

昨年十二月の中日新聞に「伊能忠敬隊の書状発見・浜名湖周辺測量協力を」という記事がのりました。

それによると真淵記念館の講師を務める「神谷さんの父尊治さんの遺品を整理した中に回状を偶然発見」ということでした。



会場風景

記事は「一八

〇五年の第五次測量で浜名湖周辺に入る半月前、先触れとして伊能測量隊が浜松宿に送った『天文方御用急回状』測量隊が持ち歩く原本の写しを現地に送り、さらに宿の役人が書き写して各村に回す方法で伝えられた。神谷家で見つかった

たものは縦二十センチ、横五メートルの書状に文字がびっしり詰まり、伊場、浅田、明神野（現神田、以上浜松市中区）、東若林、若林、増楽、高塚（以上同市南区）の七村に宛てられていた。案内人や宿泊地、食事の手配から、『雨天で測量できない場合。器材を置く土地を用意シテほしい』という要望も記され、あらかじめ街道沿いの村々の状況を把握しよう、家数や寺社数、街道上の長さを記した書状の提出も依頼している。さらに七村の家や寺社の数、街道上の長さを記した『御測量御用村々書上帳』も一緒に見つかった。現地から調査隊に返信した文書の写しとみられる」というものです。

この資料を二月に、浜松にある「浜松市立賀茂真淵記念館」の冬期講座で披露するということがだったので応募し、今回受講してきました。

開講する前の挨拶の中で館長が「今回の講座は二つの新聞（中日新聞、静岡新聞）に取り上げられたこともあって、昨日まで受講したいという希望があり、今回は定員六〇名のところ九〇名とした、手狭な受講で申しわけありません」という挨拶がありました。講師を務める神谷さんは半世紀にわたり地元の歴史を研究し、浜松史蹟調査顕彰会の専門委員を務め、地元では知られた方で、多くのファンがおられるために講義はいつも盛況だそうです。しかし今回はさらに伊能忠敬の講座と知った県内の一円の方からの問い合わせが多かったということです。伊能忠敬に関心を持っている方が多いということなのでしょう。

今回の講座では伊能忠敬がだした「先触」と、各村が出した「書上」が紹介されました。今後全体の紹介が待たれます。

なお、今回の受講に先立ち静岡県史編さん収集資料の中の伊能忠敬



アメリカ国会図書館大図第111号浜松（部分）

の先触を調べたところ、第五次のものが二点、第九次のものが二点ありました。この中で第五次の一点は今回の講座で公開された浜名湖測量のもので、違う村で保存されていたものです。これには村どうしのやりとりの他、老中、勘定奉行、測量隊からの先触が含まれていました。

（かとう ちゅうぞう）



伊能図フロア展 in 愛媛 会場の賑わい（2010年8月 伊予市「しおさい公園」市民体育館）

コラム

《松山市T氏のブログ》

フロア展 in えひめ観覧記の一部》

…人間が一心不乱に働けばすごいことができるんやねー、頭が下がる思い。伊能忠敬らの功績を体感できて、大人から子供まで楽しめる展示。期間が4日間と短かったので、行けるかどうかと思っていましたが、なんとか行くことができて良かったです。

「風雲児たち」*に伊能忠敬が出てきていたはずなので、また読みなおそう。

*みなもと太郎作（未完）、江戸時代300年を通して時代の発展に関わった人間たちの運命を描く大河漫画、作者は『歴史マンガの新境地開拓とマンガ文化への貢献』に対して第8回手塚治虫文化賞（2004）、幕末編に対して第14回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞（2010）を受賞している（ウィキペディアによる）。（編集部）

伊能忠敬の足跡

伊能大図中国地方フロア展開かれる

上田 勝俊



全国の皆様こんにちは！鳥取市青谷町の「青谷郷土館」で伊能大図中国フロア展「伊能忠敬の足跡」が開催されました。期間は平成二十年二月四日から平成二十三年一月一〇日まで。

鳥取市青谷町は弥生時代の脳が発見されて一躍全国的に注目を集めている日本海沿岸にある漁業の町。今回は国土地理院が制作した伊能大図（大日本沿海輿地図）のレプリカの内、中国地方の地図をフロアに敷き詰め鑑賞者に提供。同時に伊能忠敬の偉業を偲ぶべく測量に使用した測量具のレプリカを数点展示。青谷で当時伊能忠敬に面会してお世話をした石井世左衛門の末裔が所蔵する貴重な天文関係の書籍や、異人の国の民俗資料書籍等も展示。鳥取で逗留した「かろや」の位置図、鳥取市に編入合併した八頭郡河原町袋河原の陣屋を営営し、宗旨庄屋、後に庄屋を務め、伊能忠敬一隊の宿舎を提供し接待をした上田半兵衛の末裔が所蔵している「天文成象」等も展示してより幅の広い展示会となりました。

展示会場には関西地方から来訪された観光客なども。「ああこれが話に聞く伊能図か」とか「以前からぜひもう一度見たいと思ってたんや」などの関西弁が飛び交う中で伊能忠敬の偉業を讃える様子が此処かしこにありました。

館の招きで近くの小学生グループも来館し地図の大きさや今の地形と変わらぬ伊能図の正確さに感心し、自分の気になる地が見つかる。「ああここだがー」とそれぞれ小さい仲良しグループで楽しそうに鑑賞をしていました。

私は九鬼男爵家選定の「伊能忠敬公の肖像画」御軸と「天文成象」関連品を提供して、展示会場に拝見に伺いました。

郷土館で今回の展示を担当された学芸員の森田明子さんの話によると展示期間中の来館者は約八〇〇名、鳥取県内では伊能ウォーク開催

話題

伝記を読んで感動した人ランキング

- 1位 野口英世
- 2位 ヘレン・ケラー
- 3位 マリー・キュリー
- 4位 トーマス・エジソン
- 5位 アンネ・フランク
- 6位 坂本龍馬
- 7位 フローレンス・ナイチンゲール
- 8位 マザー・テレサ
- 9位 伊能忠敬
- 10位 マハトマ・ガンジー

2011年3月26日(土)

朝日新聞 Be on Saturday より

同社の会員サービス組織「アスパラクラブ」のアンケート結果(回収 2402 人)。国内外の偉人約 60 人を選択しとし、伝記で感動した人を 5 人まで選択する方式で行われた。

後のフロア展で鳥取市内にある市立歴史館「やまびこ館」での開催以来で特に倉吉以西の方に関心を持っていたとのことでした。TV ニュースで周知の年末年始に鳥取県下は一〇数年来の豪雪となり天候不順が続いたため残念ながら来館者の数がのびなやんだようでした。しかしながら伊能関係文書の国宝指定を受けるかのごとく今回県内で開催されたことは大変に意義深い事だったと思います。私も以前のフロア展をじっくりと拝見していなかったのが今回は新しい発見もあり大変ありがたい展示会だったと思いました。

(うえだ かつとし・五彩庵文庫)

読書欄より

「江戸の天文観測3部作完成」

2011年4月3日 産経新聞より

児童書版元の「くもん出版」による、小学校高学年以上の読者を対象にした左記の3冊が出揃いました。

「3部作は、児童書の体裁をとっているが、楽しいイラストと貴重な写真が多数収録されている上、歴史の教科書や参考書とは異なる娯楽性の高い文章は、児童や生徒だけではなく広く一般読者にもおすすめる内容」と紹介されています。

① 『天と地を測った男 伊能忠敬』 岡崎ひでたか著 平成15年6月刊行

② 『月のえくぼを見た男 麻田剛立』 鹿毛敏夫著 平成20年4月刊行

③ 『星空に魅せられた男 間重富』 鳴海風著 平成23年4月刊行

出版

「図説伊能忠敬の地図をよむ 改訂増補版」

渡辺 一郎・鈴木純子著 河出書房新社

2011年12月30日刊行 本体1800円

「ふくろうの本」シリーズとしてすでにおなじみの本ですが、今回、①新情報による本体部分改訂 ②新たな一章(第八章伊能図の復活)を追加し、アメリカ議会図書館大図など、初版刊行後の新発見情報、その他を増補 ③巻末の「現存する伊能図一覧表」を全面改訂 ④伊能大図一覧表(現存写本一覽)の増補による改訂増補版が刊行されました。

香取市義援金受付窓口

受付期間 平成 23 年 9 月 30 日まで

義捐金の受入方法

振り込みの場合

下記の口座に最寄りの金融機関から。金融機関により手数料免除の場合もあるが、ATM では適用されない

- ・ 金融機関名 京葉銀行 佐原支店
- ・ 預金種目 普通預金
- ・ 口座番号 6061261
- ・ 口座名義 香取市災害義援金（カトリシサイガイギエンキン）

現金書留の場合

- ・ 送付先 〒287-8501 香取市佐原口 2127
香取市会計課（香取市災害義援金）
- ・ 郵便物の種類 現金書留（書留料金有料）

義援金は特定寄付金として所得控除対象となる可能性あり。領収書が必要な場合はその旨付記

研究会としての応募は別記の通りですが、個人でご協力下さる場合は、研究会会員 ○○○○として上記宛お送り下さい。

展示会報告 2010.10・9～11.23（終了）

伊能忠敬、大分を測る—大分測量二百周年—

大分市立先哲史料館 平成 22 年度秋季企画展



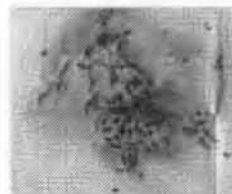
展示会パンフレットより

（表紙）



（4 頁）大分での足跡・測量日記・
惣町大帳（中津町会所記録）

大分市立先哲史料館（〒870-0814 大分市大字駄原 587-1 T:097-546-9380 F:097-546-9389）で、伊能測量をテーマにした企画展示がひらかれました。パンフレット（表紙とも 8 頁）の一部を紹介します。



裏表紙（部分）白杵沿岸実測図
（白杵市教育委員会蔵）

各地のニュース・会員の活動

石川県 河崎倫代さん

本年三月七日、羽咋市歴史民俗博物館の特別講座で講演、伊能隊の能登測量之際に随行した地元の人々の報告書、神社の文書から、測量隊との対応の様子などを解説した。

左・「中日新聞」二〇一一年三月七日
(中日新聞社許諾済)

伊能忠敬の功績解説

金沢 研究会の河崎さん講演

江戸時代に精度の高い日本地図を完成させたことで知られる伊能忠敬の能登測量をテーマに、河崎倫代・伊能忠敬研究会副会長・金沢市が六日、羽咋市歴史民俗資料館で講演した。

河崎さんによると、測量隊に付き添い案内人として羽咋郡・鹿島郡を随行した地元の人

伊能忠敬の能登の測量について講演する河崎・研究会副会長・羽咋市歴史民俗資料館で



「伊能忠敬が作った地図には今なお残る地名が記されており、地名は地域の宝です」と、河崎さんは強調した。講演は同資料館が民四十人が参加し開特別講座として、古文書を楽しむ会とともに

(島崎勝弘)

ウォーキングの楽しみ

「完全復元全国巡回伊能図フロア展 in 水戸」終わる



市道に繰り出す参加者。暑い暑い日曜日

忠敬のすごさに感銘を受ける

「完全復元全国巡回伊能図フロア展 in 水戸」が、水戸市青柳公園市民体育館で開かれた。完全復元全国巡回伊能図フロア展「水戸」に尽力された川上さんの投稿記事です。開会前に参加をよびかけ、た記事も合わせて送っていただきました。入場者はおおよそ三〇〇〇人。(四八頁にお便り)

左・「常陽新聞」二〇一〇年七月一八日

水戸市 川上 清さん

昨二〇一〇年七月一七日から二〇日、水戸市青柳公園市民体育館で開かれた「完全復元全国巡回伊能図フロア展「水戸」に尽力された川上さんの投稿記事です。開会前に参加をよびかけ、た記事も合わせて送っていただきました。入場者はおおよそ三〇〇〇人。(四八頁にお便り)

左・「常陽新聞」二〇一〇年七月一八日

～今年の干支～

卯（兎）に因んだ地名

齋藤 仁



卯（兎）に因んだ地名大集合。
今年も齋藤さんから寄せられました。
遅れましたが紹介します

伊能測量開始 210 年

～伊能忠敬関係資料国宝指定記念～

讃歌『確かな一歩』

（伊能忠敬研究会 制定）

踏み出した 確かな一歩が
世界に示した 姿、形

伊能忠敬
謙譲の心で 生きた

礼節常に 人に感謝
精励の日々を つなく
測量人生

確かなものを 求めて
与えられた命の限り
地球の不思議を 学ぶこと

東から西へ連なる緑の島々
美しい日本の 姿、形
歩いて 歩いて 描いた人は
伊能忠敬

確かな一歩

作詞 柏木隆雄
作曲 朝岡真木子

お詫びと訂正

前号(60号)で「確かな一歩」の歌詞を紹介しましたが、手違いで1行脱落しておりました。お詫びして訂正いたします。左の歌詞が正しい歌詞です。

（事務局）

CD 配布について
次頁をご覧ください

※ 会員から

・宮内 敏さん（銚子市）

ホームページ開設

お世話になっております。恥ずかしながら、この度HPを立ち上げました。かなり以前より何度か立ち上げを目指して作業をしました。最後のアップ段階で決意できずお蔵入りし今日に至っていました。今回、佐原での伊能忠敬の国宝指定祝賀会を機会に思い切ってアップを決めました。

※HPは主に下総・常陸を中心とした近世史料、伊能忠敬・宮本茶村・関戸覚蔵などの顕彰をテーマとする「伊能忠敬資料館」です…
(<http://www.ics-net.ne.jp/~hamataku/>)

・上田勝俊さん（鳥取市）

「○頁に関連記事」…近々、伊能隊通過時の鳥取藩資料と見る機会がありますので、又これらも御紹介しようと思っております。会長様始め皆様によりしくお伝え下さい。

（平成二三年一月二日）

・川上清さん（水戸市）

…常陽新聞連載「ウォーキングの楽しみ」から2編、平成22年6月6日第49回「伊能ウォーク10年後」、平成22年7月18日58回「完全復元全国巡回伊能図フロア展 in 水戸」終わる（46頁参照）、今では旧聞になりましたが、水戸で伊能図展を開いた前と後に常陽新聞に投稿したものです。常陽新聞は土

浦市に本社を置き、読者1万人ほどの地方新聞社です。対象地域は茨城県内。

このたびの国宝記念の行事に「尽力」苦労さまでした。良い時に良いチャンスに恵まれ、参加できたことを喜んでおります。

上記（記事）はあの時の経緯に触れたので、お役にたてればと思ってお送りいたしました。（平成二三年二月一七日）

※ 会員情報

入会 伊藤浩史 菱山剛秀
退会 今村恵二 土肥規男

※ フロア展日程

地震の影響で、地域でも発表済みだった香取市（3月25日（金）〜27日（日））、郡山市（4月29日（金）〜5月1日（日））は当面中止となりました。以下、近日中の開催予定です。

・2011年5月28日（土）〜29日（日）

「完全復元伊能図全国巡回フロア展」千葉工業大学 体育館（芝園キャンパス）

2011年6月16日（木）〜6月19日（日）

・完全復元伊能図全国巡回フロア展「帯広」十勝オーバル（スケートセンター）北海道川西郡芽室町

※ 日々の話題

・「中日新聞」 「伊能忠敬隊の書状発見―浜名湖周辺測量協力を」（二〇一〇年十二月二

七日）

・新聞記事（国宝指定・研究会設立十五周年記念例会・子孫集合関係）

「伊能忠敬の子孫らゆかりの佐原に集合」（『読売』二月十二日） 「伊能忠敬の子孫ら集合」（『千葉日報』二月十三日） ほか、同日『朝日千葉版』『日経』『読売』ほか、『共同』にて地方紙多数

・NHK12時のニュース「子孫集合」

・『読売新聞』（オンライン） 「伊能忠敬旧宅も…佐原の伝統的町並み、被害深刻」（三月二三日）

・完全復元伊能図全国巡回フロア展「南信州飯田」四月二日〜二四日 飯田市鼎体育館』『南信州新聞』『信濃毎日』など

※ お知らせ

「確かな一歩」のCD 配布について

二月の例会当日に配布したCDの残部を希望者に配布します。数に限りがありますので、先着三五名までとします。葉書に、送付先住所、氏名を明記の上、事務所までお送り下さい。

事務処理上、六月三十日をもって切り替えます。同日まで必着に「留意下さい」。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

《会報》—原稿締切と発行予定—

発表誌 原則として年四回

第62号締切5月末 発行7月

第63号締切7月末 発行9月

第64号締切10月末 発行12月

第65号締切1月末 発行3月

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務所が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

（07年8月よりアドレスが変わりました）

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は原則として8頁迄です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。CD（推奨）、メール添付、手書き可。FD要相談。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしております。

伊能忠敬研究会 関係のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadtaka.org/>（休止中）

「InoPedia（イノペディア）」…伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>（担当・渡辺名誉代表）

「伊能忠敬研究会・資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ

伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田理事）

<http://www.ttrm.or.jp/koko>

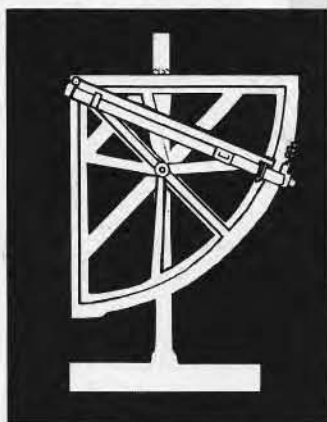
編集後記

◇前田幸子さんより、編集をひきつぎました。事務局長の鈴木純子です。前田さんご苦労さまでした。◇当面できるだけ遅れを取り戻して行きたいと考えています。◇15周年記念例会の記念誌を別冊として発行しました。別途お送りします。◇さて、このたびの大災害については、言葉に尽くせない思いでいっぱいです。無残にも日常生活を断ち切れ、命、家族・親族・友人、住まい、仕事…と何よりも大切なものを失い、傷つけられた多くの方々に衷心よりお悔やみとお見舞いを申し上げ、今日より明日が少しでも好転することを願っています。◇香取市にも大きな被害があったことは本文のとおりです。旧宅も含むあの佐原の町並みが戻ることを念じます。◇生命にかかわる災害とともに、史料・文化財の逸失も深刻です。被災情報を集積し、専門技術による救援活動を目指すボランティアの [saveallak](http://www.saveallak.com)（博物館・図書館・文書館・公民館）サイトが立ちあがっています。（丁）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.61 2011



REPORT on Disaster		
The 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake and Katori-shi	Secretariat	1
TOPICS I		
Inoh Tadataka Society celebrates its 15th Anniversary	HOSHINO, Yoshihisa	4
Memorandum through conducting the Event of Celebration	WATANABE, Ichiro	5
Record of Regular Meeting	Secretariat	8
Donation of Documents from T. Fujioka	Editorial Committee	9
TOPICS II		
For the Castle Town of Saga	MATSUO, Norishige	10
Tadataka and Oyama-ko	ONUMA, Akira	16
Comic Story of Inoh told by Shi-no-suke	SUZUKI, Junko	22
Place Names and Landscapes in " <i>Inoh Daizu Soran</i> "(15)	HOSHINO, Yoshihisa	23
ARTICLE		
Study of Inoh Tadataka (11)	ISHIYA, Haruka	30
TOPICS III		
Report of the Lecture "Inoh Tadataka at Hamana-ko Region	KATO Chuzo	41
Inoh Tadataka in Tottori : Exhibition	UEDA, Katsutoshi	43
Miscellaneous : Books, etc.,	Editorial Committee	44
Reception Point of Contribution for the City of Katori	Secretariat	45
MEETING ROOM		
Letters from Members, Daily Topics and Informations	Editorial Committee	46

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY